

木の下館跡

第1～4次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第198集



2012

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



き した た て あと
木の下館跡

第1～4次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第198集

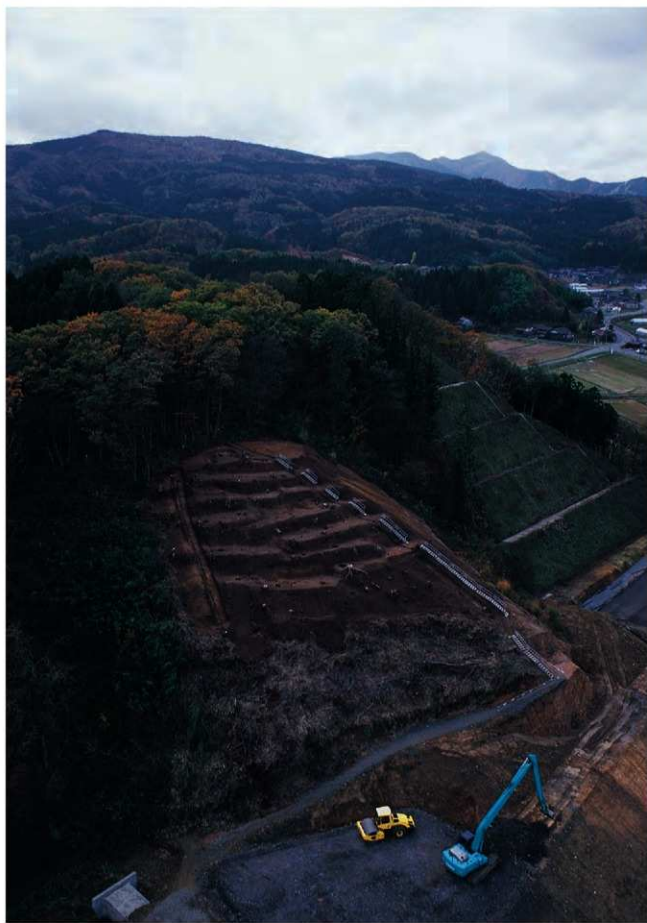
平成24年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





第3次調査区全景



第4次調査区全景

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、木の下館跡の調査成果をまとめたものです。

木の下館跡は、山形県西部に位置する鶴岡市にあります。鶴岡市は庄内平野の南部に位置し、西は日本海、東に出羽三山、北に鳥海山をのぞむ自然景観豊かなところです。歴史的にも旧石器時代を始め、庄内地方では唯一の古墳である菱津古墳や、県指定史跡の荒沢窯跡群など重要な遺跡が数多く存在しています。江戸時代には徳川四天王の筆頭である酒井氏が入部し、以後約250年にわたって酒井氏の城下町として発展してきました。最近では歴史小説を映画化した舞台として脚光を浴びるなど、歴史的風土の豊かな土地柄です。

この度、日本海東北自動車道（温海～鶴岡間）の建設事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、木の下館跡の発掘調査を実施しました。調査では、中世山城に伴う7段の曲輪跡や3基の窯跡、建物跡などが検出され、山形県の歴史を探る上で多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様から感謝申し上げます。

平成24年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 相馬周一郎

凡 例

- 1 本書は、日本海東北自動車道（温海～鶴岡）建設に係る「木の下館跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、連絡会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は、東日本高速道路株式会社東北支社（平成16年度）および国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所（平成17・18・23年度）の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は福岡和彦、小笠原伊之、佐藤智幸が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、斉藤敏行、安部実、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S B…掘立柱建物跡	S T…竪穴状遺構	S F…道路状遺構	S D…溝跡
S K…土坑・陥穴跡	S P…ピット・柱穴	S Q…窟跡	S X…性格不明遺構
E B…掘り方	R P…登録土器	R Q…登録石製品	R X…動物遺体
B…骨	S…自然礫	W…自然木	
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺は各図に示した。土器実測図において、断面が黒塗りの遺物は須恵器を表す。
- 8 基本順序および遺構覆土の色調記載については、2002年・2008年版農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調査要項

遺 跡 名	木の下館跡		
遺 跡 番 号	203-084		
所 在 地	山形県鶴岡市水沢字水京		
調査委託者	東日本高速道路株式会社東北支社（平成16年度） 国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所（平成17・18・23年度）		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受 託 期 間	平成16年11月1日～平成17年3月31日	（現地調査）	
	平成17年4月1日～平成18年3月31日	（現地調査・整理作業）	
	平成18年4月1日～平成19年3月31日	（現地調査・整理作業）	
	平成23年4月1日～平成24年3月31日	（現地調査・整理作業）	
現 地 調 査	平成16年12月10日～12月15日	（第1次調査）	
	平成17年9月27日～12月9日	（第2次調査）	
	平成18年4月17日～7月14日	（第3次調査）	
	平成23年9月20日～11月25日	（第4次調査）	
調査担当者	平成16年度	調査第三課長	渋谷孝雄（調査主任）
		主任調査研究員	伊藤邦弘

	調査員	小林啓				
平成 17 年度	調査第三課長	渋谷孝雄				
	主任調査研究員	黒坂雅人				
	主任調査研究員	大飼透 (調査主任)				
	主任調査研究員	石井浩幸				
	調査員	渋谷純子				
平成 18 年度	調査第三課長	渋谷孝雄				
	調査研究主幹	佐藤正俊 (調査主任)				
	専門調査研究員	黒坂雅人				
	調査員	深澤篤				
平成 23 年度	整理課長	斉藤敏行				
	調査課長	安部実				
	考古主幹	黒坂雅人				
	考古主幹	伊藤邦弘				
	主任調査研究員	福岡和彦 (調査・整理主任)				
	調査研究員	小笠原伊之				
	調査員	佐藤智幸				
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室 (平成 16・17 年度)					
	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室 (平成 18 年度)					
	山形県教育庁文化財保護推進課 (平成 23 年度)					
調査協力	鶴岡市教育委員会					
	山形県庄内総合支庁建設部					
	山形県教育庁庄内教育事務所					
業務委託	基準点測量業務	有限会社石井測量設計事務所				(第 2 次調査)
		株式会社石川測量事務所				(第 4 次調査)
	地形・遺構測量	株式会社セビアス				(第 2 次調査)
		株式会社シン技術コンサル				(第 3 次調査)
		株式会社石川測量事務所				(第 4 次調査)
	理化学分析業務	株式会社パレオ・ラボ				(第 2 次調査)
発掘作業員	秋山大	五十嵐しげ子	五十嵐弘安	五十嵐優	伊藤重雄	伊藤敏恵
	伊藤兵一	伊藤雅子	伊藤礼子	遠藤豊	大瀬元子	加藤民雄
	小松恒弥	小松ミハ子	齋藤武儀	佐々木陽子	佐藤昭子	佐藤勝男
	佐藤賢治	佐藤幸子	佐藤新左エ門	佐藤ミヤエ	佐藤彌太郎	佐藤庸子
	庄司瞳	瀬尾敏子	武田桂三	忠録弥一郎	土岐美佐子	土田允
	成田七郎	野尻松雄	野尻優喜	長谷川恵美子	長谷川眞一	長谷川久子
	広井繁彌	本間京子	本間金二	本間政男	矢口悦子	若公四郎
整理作業員	安達久恵	石井恵子	佐竹敬次			(五十音順)

目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経緯	1
2	現地調査の概要	1
3	整理作業の概要	4
II	遺跡の位置と環境	
1	地理的環境	6
2	歴史的環境	6
III	調査の成果	
1	遺跡の層序	8
2	遺構と遺物の概要	8
3	検出遺構	9
4	出土遺物	11
IV	理化学分析	
1	土坑内土壌のリン・カルシウム分析	51
2	木の下館跡出土動物遺体同定	52
V	調査のまとめ	55
	報告書抄録	巻末
	付図 調査区全体図	

表

表1 遺跡位置地名表……………	4	表4 土坑内土壌の分析結果 (F P法) ……	52
表2 遺物観察表……………	50	表5 S X 219出土動物遺体産出表……………	52
表3 分析試料とその特徴……………	51	表6 S X 219検出ウマ下顎臼歯の全面高計測値……………	53

図 版

第1図 地形分類図……………	3	第23図 S Q 316・320・354炭塗跡……………	32
第2図 遺跡位置図……………	5	第24図 第4次調査区縄張り……………	33
第3図 第2～4次調査区基本層序図……………	8	第25図 第4次調査遺構配置図(1)……………	34
第4図 調査区概要図……………	12・13	第26図 第4次調査遺構配置図(2)……………	35
第5図 第2次調査遺構配置図(1)……………	14	第27図 第4次調査遺構実測図(3)……………	36
第6図 第2次調査遺構配置図(2)……………	15	第28図 第4次調査遺構配置図(4)……………	37
第7図 第2次調査遺構配置図(3)……………	16	第29図 第4次調査遺構配置図(5)……………	38
第8図 第2次調査遺構配置図(4)……………	17	第30図 第4次調査トレンチ土層断面図(1)……………	39
第9図 第2次調査遺構配置図(5)……………	18	第31図 第4次調査トレンチ土層断面図(2)……………	40
第10図 第2次調査トレンチ土層断面図(1)……………	19	第32図 S K 402・404・408・429・453・454・455土坑……………	41
第11図 第2次調査トレンチ土層断面図(2)……………	20	第33図 第4次調査検出ピット(1)……………	42
第12図 S B 240掘立柱建物跡……………	21	第34図 第4次調査検出ピット(2)……………	43
第13図 S D 6・185溝跡、S K 223陥穴跡……………	22	第35図 縄文土器・須恵器・須恵器系陶器・陶磁器……………	44
第14図 S K 154・194・198・199・224土坑……………	23	第36図 陶磁器……………	45
第15図 S X 216・219・220性格不明遺構……………	24	第37図 陶磁器……………	46
第16図 第2次調査検出ピット……………	25	第38図 陶磁器……………	47
第17図 第3次調査遺構配置図(1)……………	26	第39図 陶磁器・瓦質土器……………	48
第18図 第3次調査遺構配置図(2)……………	27	第40図 石器・銭貨……………	49
第19図 第3次調査遺構配置図(3)……………	28	第41図 S X 219出土ウマ下顎骨……………	53
第20図 第3次調査遺構配置図(4)……………	29	第42図 S X 219出土ウマ骨・上 寛骨……………	54
第21図 第3次調査遺構配置図(5)……………	30	下左 大腿骨頭、下右 四肢骨 骨幹部 破片……………	
第22図 S T 301・302竅穴状遺構……………	31		

写真図版

巻頭写真1 第3次調査区全景……………	写真図版6 S T 301・302竅穴状遺構、E B 303・304・305・306
巻頭写真2 第4次調査区全景……………	写真図版7 E B 307・308・309、S P 313、 S Q 316・320検出状況……………
写真図版1 木の下館跡遠景、西側3段平場検出状況……………	写真図版8 竈跡周辺完全全景、S Q 316・320断面、 S Q 354・S K 314完掘状況……………
写真図版2 S B 240掘立柱建物跡、E B 1・2・3・4……………	写真図版9 第4次調査トレンチ断面……………
写真図版3 E B 5・6・7・8・9・10・11・12……………	写真図版10 縄文土器・須恵器・須恵器系陶器・陶磁器……………
写真図版4 東側斜面検出状況、S F 160・250道路跡、 S K 198断面・完掘状況、S K 199断面・完掘状況……………	写真図版11 陶磁器……………
写真図版5 S K 223陥穴・S X 216・219・220完掘状況、 S X 219骨出土状況(1)・(2)、 S P 102完掘状況、S D 170須恵器系陶器片出土状況……………	写真図版12 陶磁器・瓦質土器・石器……………
	写真図版13 石器・銭貨・鉄滓……………

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

木の下館跡は、平成8年度に山形県教育委員会によって新規に登録された遺跡で、『山形県中世城館遺跡報告書 第3集(庄内・最上地域)』(山形県教委1997)では、築城者不明ながら戦国期に築城された城館として報告されている。また、旧街道を挟んで南側に位置する「水沢館(橋山)」と関連する施設であった可能性が指摘されている(同書91ページ)。

本遺跡は近接する行司免遺跡・興屋川原遺跡・万治ヶ沢遺跡・玉作1・2遺跡などの遺跡とともに日本海東北自動車道(温海-鶴岡間)の事業予定地内にかかることになり、日本道路公団東北支社鶴岡工事事務所(当時)と山形県教育庁社会教育課(当時)との間で遺跡の取り扱いについて協議もたれた。その結果、建設事業に先立つ記録保存のための緊急発掘調査を、財団法人山形県埋蔵文化財センターが行うことになった。

2 現地調査の概要

標高65mに位置する城館の主郭は4段の帯曲輪と三重の堀切が比較的良好な状態で遺っているが、ここは日本海東北自動車道の範囲外となるため、調査は主郭から見て、その北東部のみ(およそ5,400㎡の面積)が対象となった。該当範囲の遺構・遺物の分布状況を把握し本調査に向けての詳しいデータを収集するための試掘調査を山形県教育庁社会教育課が、平成16年9月8日～10日に行った。事業予定地内の遺跡範囲にトレンチを18ヶ所設定し、18mの調査を行った。3段の曲輪状の段差や道路跡状の掘切など、館跡に関わると思われる遺構が確認された。また、TP12から天目茶碗片が出土した。

それを受けてセンターでは、第1次調査を平成16年12月10日から15日まで214mを対象に行った。8ヶ所にテストトレンチを設定し、帯曲輪群や遺構の配置について調査した。その結果第2次調査は、平成17年9月27日から12月9日まで、遺跡範囲の東部3,900mを

対象にして行った。平成18年度の第3次調査は、第2次調査を行った範囲の西側750mを対象に4月17日から7月14日まで行った。平成23年度の第4次調査は9月20日から11月25日まで、残りの東側750mを調査した。

各調査は現場への器材搬入から手かけ、調査区の設定、重機による表土除去、遺構検出のための面整理と面精査を進め、遺構プランの検出後に平面図作成・遺構登録などの手順を踏んだ。また、各段階で写真撮影を行い、一連の調査作業が記録として辿ることができるように配慮した。以下には発掘調査の経過について、その概要を週単位で記述する。

第1次調査：平成16年12月10日～12月15日

12月10日～12月15日：8ヶ所にテストトレンチを設定し、帯曲輪群や遺構の配置について確認調査を行った。

第2次調査：平成17年9月27日～12月9日

9月27日～10月1日(第1週)：調査対象区の周辺に放置されていた伐採木の除去作業をしている中で、これまでに確認されていなかった曲輪群が検出された。曲輪群は尾根の頂部まで7段確認された。

10月4日～10月8日(第2週)：伐採木を片付け、除草を行ったところ、頂部の平場と、西側斜面の曲輪群が検出された。また、発掘調査対象地区外の斜面の環境整備を行い、斜面の全体の様子がわかるようになった。

10月11日～10月15日(第3週)：バックホーによる表土除去を行い、あとに残る細い木の根などは、手作業で丁寧に取り除いた。また、頂部曲輪の地山上で、土色変化が見つかった。

10月18日～10月22日(第4週)：調査区東側の古道部の表土を重機で除去した。また、頂部曲輪西側には遺構が数基確認された。

10月25日～10月29日(第5週)：調査区東の古道部・頂部曲輪の本格的な面整理・遺構検出が始まり、建物跡

や土坑・溝状遺構等が検出された。

11月1日～11月5日(第6週):西側に配置された曲輪や平場、古道跡の写真撮影のための整備作業を行った。

11月8日～11月12日(第7週):古道跡東側では面整理、そして頂部の平場では遺構精査を行った。また、北東部の斜面は段々になっており、曲輪がどうか詳細を調べるため、トレンチを設定した。

11月15日～11月19日(第8週):調査区北東部の段々がついた斜面のトレンチ掘りを行い、縄文時代の石器が出土した。また、調査区西部斜面にある方形遺構(SX216)の精査のため、十字状に覆土を残して掘り下げた。

11月22日～11月26日(第9週):西側斜面の隅丸方形の土坑状遺構(SX219)の精査を行い、馬の骨が出土した。23日には発掘調査説明会を行った。

11月29日～12月9日(第10・11週):調査終了後に現地引渡しを行った。

第3次調査:平成18年4月17日～7月14日

4月17日～4月21日(第1週):調査区の環境整備や傾斜が急なため、階段を作り安全の確保を行った。

4月24日～4月28日(第2週):トレンチの面整理及び周辺の清掃を行った。週の後半にはトレンチと最上段の写真撮影を行った。

5月8日～5月12日(第3週):曲輪と思われる段や住居跡と思われる遺構を検出した。

5月15日～5月19日(第4週):曲輪の土層断面を精査し、頂上から7段の曲輪があることを確認した。

5月22日～5月26日(第5週):館跡上部や斜面を掘り下げ、段がわかるように面整理を行った。

5月29日～6月2日(第6週):住居跡の柱穴が規則正しく並んでいることを確認した。中世陶器も出土した。

6月5日～6月9日(第7週):館跡の下方から炭窯と思われる窯跡が見つかり、焼土や炭化物が残り、登り窯状の様相を呈していることが確認された。

6月12日～6月16日(第8週):窯跡上面から須恵器の破片が出土した。

6月19日～6月23日(第9週):斜面にある炭窯を精査した結果、焼土や炭が大量に検出した。

6月26日～6月30日(第10週):炭窯の断面を精査

した結果、焼土や炭化した層が検出した。また、土層断面実測を行った。

7月3日～7月7日(第11週):炭窯を半裁し、土層断面図の作成と写真撮影を行った。

7月10日～7月14日(第12週):調査終了後に現地引渡しを行った。

第4次調査:平成23年9月20日～11月25日

9月20日～9月22日(第1週):業者に委託しタラップの取り付けや、調査区の環境整備を行い、作業効率の向上や安全確保のための設備を整えた。

9月26日～9月30日(第2週):業者委託による基準点測量と空中写真撮影を行った。発掘に向けて土砂の廃棄設備や洗い場の設置作業を行った。

10月3日～10月7日(第3週):曲輪の本格的な面整理・遺構検出を始め、土坑や柱穴を検出した。

10月11日～10月14日(第4週):城を構成していた斜面や曲輪の土を削り、遺構検出をした。上から1段目の曲輪下の斜面から焼土を含む遺構を検出した。

10月17日～10月21日(第5週):山の斜面に沿って7段分の曲輪を縦に切るトレンチを設置した。

10月24日～10月28日(第6週):曲輪の面整理を終え、7段の曲輪を検出した。トレンチ断面の実測を行い、図面の作成を行った。

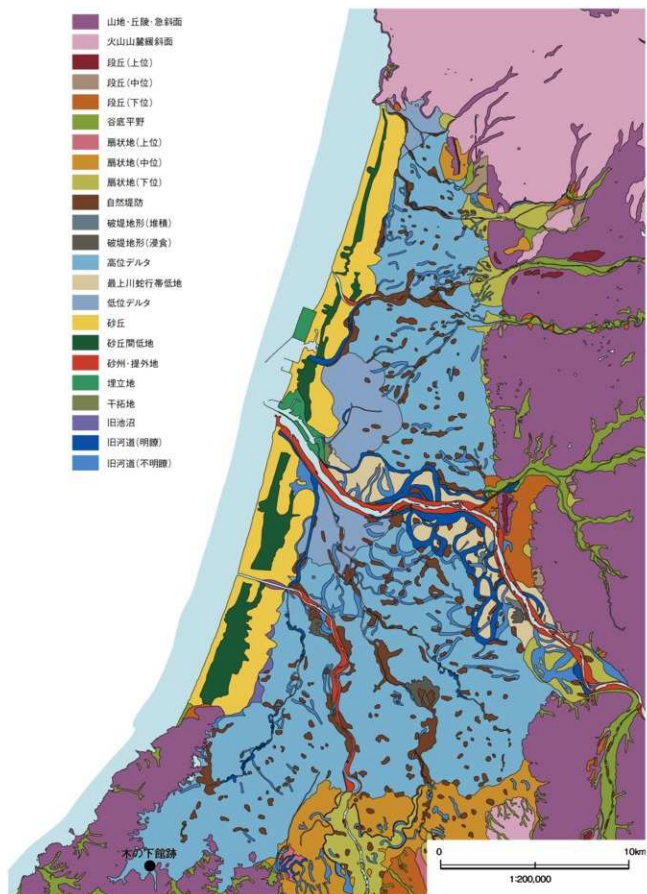
10月31日～11月4日(第7週):先週に引き続き、トレンチの断面を実測し、図面の作成を行った。また、7段ある曲輪全体の写真を、1段ずつ撮影した。

11月7日～11月11日(第8週):検出した遺構の写真撮影や、土の堆積状況の調査を行った。

11月14日～11月18日(第9週):土層断面図を作成し、写真撮影を行った。遺跡全景を撮影するため、空撮を行った。18日には関係者への調査説明を行った。

11月21日～11月25日(第10週):タラップや器材を撤出し、発掘調査を終了した。

第2・4次調査では、委託業務による5m×5mの方形単位の基準点を設置し、調査用方眼(グリッド)杭を設定した。遺物の取り上げはグリッドを基本とし、遺構出土の遺物に関しては遺構名とグリッドを併記して取り上げた。また、遺構との関係で出土状況が重要と思わ



第1図 地形分類図

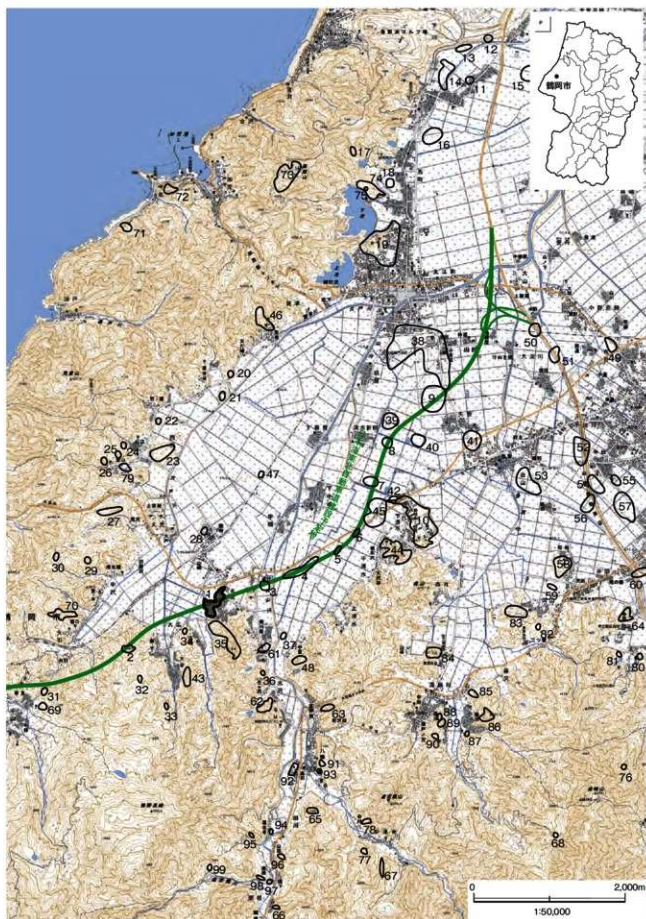
れる遺物については、登録遺物として取り上げ出土地点を記録した。遺構個別図の記録は基本的に40分の1の縮尺で平面・断面の記録を行い、遺構全体図は業務委託で図化した。現地調査の撮影機材は、6×7判カメラのほかに、35mm判カメラ、デジタルカメラを使用した。フィルムは、35mm判カメラはリバーサルフィルム、中判カメラは、リバーサルフィルムとモノクロフィルムを併用した。デジタルカメラは日常の作業状況や、調査工程の記録として用いた。

3 整理作業の概要

平成17年度の整理作業は、第2次調査で出土した遺物の洗浄・注記作業と、遺構実測図の点検作業を行った。平成18年度は、第2・3次調査で出土した遺物の洗浄・注記作業と遺構実測図の点検作業を行った。平成23年度は第2～4次調査で出土した遺物の洗浄・注記・実測・拓本・トレース・遺構配置図の作成・遺物写真撮影や、遺構個別図や遺物挿図の作成を行った。さらに本文執筆と編集作業を行い、本書の刊行を行った。

表1 遺跡位置地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	木の下船跡	縄文・中世	34	大広A遺跡	縄文	67	大沢船跡	中世
2	万治ヶ沢遺跡	縄文・平安	35	水沢船跡	中世	68	藤沢岩屋洞窟	平安・中世
3	行可免遺跡	平安	36	地藏堂山経塚	平安・中世	69	荒船跡	中世
4	栗屋川原遺跡	古墳・平安	37	中里D遺跡	奈良・平安	70	矢引船跡	中世
5	玉作1遺跡	古墳・奈良・平安	38	山田遺跡	古墳・奈良・平安	71	今泉船跡	中世
6	玉作2遺跡	古墳・平安	39	清水新田遺跡	古墳	72	船山船跡	中世
7	岩崎遺跡	古墳・奈良・平安	40	矢筈B遺跡	古墳	73	高船跡	中世
8	南田遺跡	古墳・奈良・平安	41	助作遺跡	古墳	74	正法寺船跡	中世
9	矢筈A遺跡	古墳・奈良・平安	42	極舟坂B遺跡	平安	75	正法寺山遺跡	縄文
10	出張取城跡	中世・近世	43	広沢船跡	中世	76	金峯B遺跡	縄文
11	西田面遺跡	平安	44	栗船跡	中世・近世	77	操船船跡	中世
12	下川2遺跡	平安・中世	45	玉作3遺跡	平安	78	黒森船跡	中世
13	西ノ川遺跡	平安	46	斐津船跡	中世	79	金山船跡	中世
14	西谷地遺跡	平安・中世	47	谷地船跡	中世	80	杉ヶ沢D遺跡	縄文
15	五百舟遺跡	古墳・平安	48	中里船跡	中世	81	仏供入船跡	平安
16	八幡田遺跡	平安	49	上大坪遺跡	古墳・平安	82	岡山B遺跡	平安
17	越中台架跡	平安	50	中野遺跡	古墳・平安	83	岡山A遺跡	縄文・平安
18	駒繁遺跡	奈良・平安	51	畑田遺跡	古墳	84	鎌巻山船跡	中世
19	尾浦城跡	中世	52	大道下遺跡	平安	85	鎌倉船跡	中世
20	斐津古墳	古墳	53	西地田遺跡	古墳・奈良・平安	86	藤沢船跡	中世
21	火打崎A・B遺跡	縄文・奈良・平安	54	月記遺跡	古墳・平安・中世	87	遊行上人墳墓	中世
22	西日経塚	中世	55	大東遺跡	平安・中世	88	華人山墳墓	中世
23	山門B遺跡	古墳・飛鳥・奈良	56	後田遺跡	古墳・平安・中世	89	高野山船跡	中世
24	山門C遺跡	奈良・平安	57	地ノ内遺跡	平安・中世	90	かき山船跡	中世
25	金山A遺跡	奈良・平安	58	井岡城跡	平安・中世	91	七日台船跡	中世
26	金山B墳墓群	奈良・平安・中世	59	井岡遺跡	平安・中世	92	田川船跡	中世
27	荒沢船跡	奈良・平安	60	塔の腰遺跡	平安・中世	93	七日台墳墓	中世
28	水沢船跡	奈良・平安	61	神楽船跡	中世	94	田川蓮華寺跡	奈良・平安・中世
29	玉林坊跡	中世	62	石山船跡	中世	95	柴田山遺跡	縄文
30	籠山遺跡	縄文	63	大蔵院船跡	中世	96	岡根C遺跡	縄文
31	矢引船跡	縄文	64	赤坂船跡	中世	97	岡根F遺跡	縄文
32	大広菊台遺跡	奈良・平安・中世	65	田川城跡	中世	98	岡根D遺跡	旧石器・縄文
33	大広B墳墓群	奈良・平安・中世	66	橋下船跡	中世	99	岡根E遺跡	縄文



※国土地理院発行の2万5千分の1地形図「三瀬」「鶴岡」を使用し、5万分の1で掲載

第2図 遺跡位置図

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

現在の鶴岡市は、平成の大合併で2005年10月1日に藤島町、羽黒町、柳町、朝日村、温海町が旧鶴岡市と新設合併して発足した市であり、面積は東北地方の市の中で最も大きく、全国の市町村の中でも10指に入る大きさである。環境は、北は山形県で一番高く美しい稜線をもつ出羽富士「鳥海山」、東は千数百年にわたり全国からの信仰を集める修験の山「出羽三山」(羽黒山・湯殿山・月山)をはじめとする出羽丘陵、南は広大なブナの原生林を有する朝日連峰と、三方を名山が囲む。山形の母なる川「最上川」と「赤川」の2つの大きな川が流れ、やがて日本海へと至る。西に広がる日本海に面し、南北約120kmの海岸線が続く。

気候は、対馬海流の影響を受け、海洋性の比較的温暖な気候をもつ。しかし、夏は昼夜の気温の寒暖差が大きく、旧盆を過ぎた頃から、夜風が涼しくなってくる。冬は山間部を除き、積雪は比較的小さいが、日本海からの強い北西の季節風が庄内平野を吹き抜け、地吹雪や海岸に打ち寄せる波の泡が強風で舞い上がる「波の華」といった現象をもたらす。

水沢地区は、JR羽越本線鶴岡駅から県道332号と国道7号を西に約10km進んだところ、庄内平野南西部に位置する集落である。木の下館跡は、この水沢地区にあるJR羽越本線羽前水沢駅の南方約700mに位置し、西の大戸川、赤川の支流である東の大山川に挟まれた京田山(標高65m)の山上に立地する。楕円形の主郭のまわりに4段の帯曲輪を巡らし、北の尾根続きを三重堀切で遮断する。南側を旧浜街道(水沢坂)が走り、そこから登る山道がある。向かい側の山は半ば崩されているが、残存部に削平地や、土塁を伴った枡形のような遺構が認められ、そこから尾根伝いに水沢館へ連なっており、互いの関連性が推察される。

地目は杉林・竹林で、一部は畑地として利用されていたこともあったようである。

2 歴史的環境

鶴岡市のJR羽前大山駅から羽前水沢駅にまたがる地域は、近年の日本海東北自動車道建設事業や国道7号の拡幅工事、県営ほ場整備などの大規模開発に伴い、発掘調査が頻繁に行われた。その結果、古代～近代の遺跡が密集する地域であることが分かった。近年発掘調査された遺跡は、万治ヶ沢遺跡、行司免遺跡、興屋川原遺跡、玉作1・2遺跡、岩崎遺跡、南田遺跡などがある(表1)。

また、今年度は出張坂城跡の発掘調査も行われ、良好な資料が得られたことから、木の下館跡周辺の詳細な状況が明らかになりつつある。

鶴岡市にある縄文時代の遺跡である万治ヶ沢遺跡は、集落跡であるとともに、平安時代の生産遺跡でもある。土師器の焼成遺構20基、炭窟3基、鉄滓が見つかり、土器、木炭の生産地であることが分かり、鉄生産を行っていた可能性が高い。また、近くには11基の窯跡が確認された荒沢窯跡がある。これらの生産遺跡でられた土器や鉄が、同時代の平野部の集落に供給されていたと考えられる。

興屋川原遺跡は、古墳時代、平安時代の集落跡である。古墳時代の遺構は、中期の堅穴住居跡や土坑が見つかり、土師器、須恵器のほか、手持勾玉が出土している。平安時代の遺構は、大型掘立柱建物跡群や井戸跡、鍛冶施設と考えられる焼土遺構が見つかり、土師器や大量の木製品が出土しており、食器、農耕具、櫛、下駄などの生活用品のほか、斎車といった祭祀具、「千字文」を習書した木簡も含まれる。また、河川跡からは刀子や鍛冶滓と考えられる鉄滓が出土している。

行司免遺跡からは平安時代の木棺墓と火葬施設と考えられる遺構や「富寿神宝」などが出土しており、周囲に墓域や官衙に関する施設があった可能性が高い。

庄内地方南部(鶴岡市、三川町、庄内町)の中世城館跡の数は約170ヶ所程(山形県全体の約15%)あり、戦国時代に武藤氏の居城だった大山地区の「尾浦城」をは

じめ、田川・湯田川地区や三瀬・中山地区、それに水沢地区などの山丘部に、河川や旧街道との関連をうかがわせる立地条件で、中世の城館跡が多数存在することが確認されており、鶴岡市だけでも140ヶ所をこえる。現在の鶴岡市三瀬・中山地区・上郷（水沢）地区・田川地区・湯田川地区などは、日本海沿岸の越後方面～庄内平野を結ぶ、軍事上非常に重要な場所であったため、多数の城館が設置された可能性が考えられる。また、庄内地方南部における中世城館跡数の約32%は平野部など平地に立地する平城で、山頂や山腹に立地する、いわゆる山城は約43%に達し、丘陵先端部や舌状台地、独立丘陵の約20%を合わせた62%が山地や丘陵に立地している(酒井1997)。

鶴岡市の城館跡としては、江戸時代前期から幕末まで徳川四天王の一人、酒井氏の居城として知られ、現在の市街地中心部に位置する「鶴ヶ岡城(旧大宝寺城)」が第一にあげられる。城の名前の由来は、山形藩主・最上義光が酒田の浜で大亀が捕まったのでこれを吉兆として東禅寺城を亀ヶ崎城、亀に対して鶴ということで、大宝寺城を鶴ヶ岡城と命名したという言い伝えが残っている。当センターの発掘調査において二の丸堀跡・百門堀跡から江戸時代の多量の遺物(肥前系陶磁器、大宝寺焼、漆器の椀など)が出土した。

藤島城跡は、県立庄内農業高等学校校舎敷地内にあり、南北朝内乱の頃は南朝方の拠点となった。天正18年(1590)には強引な太閤検地への反対一揆の拠点となり、元和元年(1615)の一國一城令により廃城になるまで戦国期の厳しい荒波を乗り越え存続した。発掘調査の結果、本丸の規模は東西約95m、南北約90m、内郭が二重の土塁で囲まれていたことが分かった。

今年度発掘調査を行った出張坂城跡は、中世の城跡で、木の下館跡の北東約3kmに位置している。曲輪跡から、約20個の石を配列した集石遺構を検出した。曲輪跡の中央部分からは、大量の炭と焼土を含む溝跡と、それを取り囲むように、柱穴も数多く検出した。その中で、2間×2間の総柱の掘立柱建物跡になる可能性のある柱穴も見つかった。また、曲輪跡の少し下の斜面から、城を構成していたと考えられる幅の狭い平場も検出した。遺物は、15～16世紀代頃の播鉢片や、近世以降の陶磁器片、寛永通宝と思われる銭貨が4枚出土した。

今回、調査を行った「木の下館跡」の名称であるが、以前は「櫓の下」「城の下」と書かれていた時期もあり、「城がある場所」という意味が含まれていたようである。

昭和33年7月、通称大杉と呼ばれているあたりを開墾していた時、中世の墳墓(城の下墳墓)が発見された。この墳墓を、当時小学校に勤務していた川崎利夫が調査を行い、詳しい調査結果を得ており、その概略を記す資料を以下に掲載する。

遺跡は径約10m、高さ最高部1mをなす墳墓のほば中央部より2点須恵器質磁骨器が並んで出土した。この傍りに径2m程の杉の大木あり、祠跡もある。凝灰岩の扁平な岩片、五輪塔の水輪と思われる石を蓋にあて、その上には華大の川原石が多数あげられていた(川崎1958)。

遺物としては、2点の磁骨器である。1つは「小形壺形土器」で、肩部に耳の退化したような突起が四対あり、胴部に櫛目による大きな波状文がめぐり、胴部の張らない鬚褐色の土器である。もう1つは前者に比べ「大型の甕形土器」で、肩部より底部の近くまで横位に櫛目文がめぐり、裏面は無文で、胴部は丸味をおびてよく張っており、後者の方が古く平安末期から鎌倉期と推定している(川崎1959)。

こうした中世墳墓は、西目東現寺裏山、大谷薬師神社境内、石山不二軒裏山などからも発見されている。その立地条件として、多く小丘陵の峰上、舌状台地の突端、平野部に近い台地斜面などであり、古墳や経塚と共通しているが、例外なく社の近くにあることは注目すべきである(川崎1959)。

このように、鶴岡市の田川から水沢地区にかけての山沿いには多くの中世火葬墓が見られるが、その築造地の特徴として、川崎は「多く小丘陵の峰上、台地の突端、平野部に近い台地斜面等」にあり、古墳や経塚と共通する」とし、これらの中世火葬墓の築造について、古墳や経塚築造との共通性を指摘し、先の論説を補完している(川崎1967)。

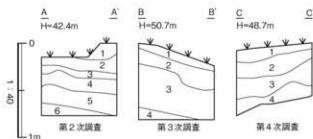
III 調査の成果

1 遺跡の層序

木の下館跡の第2次調査における基本層序は、以下の通りである。第1層は10YR3/2黒褐色シルトで軟らかくもろい。第2層は10YR4/4褐色シルトで粒細かく粘りがある。また、第1層の土を20%ブロック状に含む。第3層は10YR5/6黄褐色粘質シルトで粒細かく粘りがある。第4層は10YR7/4にぶい黄褐色粘質シルトで軟らかく粘りがある。第5層は10YR7/3にぶい黄褐色軟岩、頁岩質で軟らかくもろい。第6層は2.5Y7/6明黄褐色軟岩で軟らかくもろい。

第3次調査における調査区の基本層序は以下の通りである。第1層は10YR2/2黒褐色微砂。表土(腐植土、木の根やコケ等が腐植)。第2層は10YR4/4褐色微砂。地山粘土ブロック(3~4cm)や褐色粘土ブロックが混じる。盛土である。第3層は10YR5/6黄褐色粗砂質粘土で、細かい1~10cmの風化礫が混じる。第4層は10YR5/4にぶい黄褐色微砂質粘土で、斑点状に3~4cmの褐色粘土が混じる。

第4次調査における調査区の基本層序は以下の通りである。第1層は2.5Y4/1黄灰色シルト、しまり弱く軟らかい。表土(落葉や木の根などが腐植した腐植土)。第2層は2.5Y5/2暗灰黄色シルトで硬くしまる。盛土である。第3層は10YR5/1褐色シルトで硬くしまる。切土である。第4層は2.5Y6/8明黄褐色粘土。粘性強く硬くしまる。地山である。



第3図 第2~4次調査区基本層序図

2 遺構と遺物の概要

第1次調査では、調査区の東側にテストトレンチを8本掘り、遺構の確認と西側の帯曲輪群の存在を確認した。

第2次調査で検出された主な遺構は、次の通りである。調査区西側の頂上部(山頂とは異なる)に、3段に形成された平場が検出された。第1段は南北5~20m・東西20~30mで、その南東隅には2間×3間の掘立柱建物跡(SB 240)が位置している。第2段は南北10m・東西15mの広さで第1段の南西に位置する。第3段は第2段の南~西側で、長さ延べ30m・幅5mの「く」の字状になっている。各段の高さの差は、第1段と第2段が約20~50cm、第2段と第3段が1mである。また、調査区東端の山のみもとから平場の南東を回り、南端に向かう長さ約120m・幅2~5mの道路跡(SF 250)が検出された。この道路跡は山の東のみもとと南部の城郭主体部(調査区外)とを連絡する役割をもっていたものと考えられる。

平場と掘立柱建物跡はいずれも帰属時期を示す遺物は確認されていないが、前者は地山層を掘り込んで段差を形成している。また、後者は道路跡全体とともに山の東側に広がる平野部と南部の城郭主体部を展望できる位置で検出されていることから、両者とも城館跡に関連のある施設であった可能性がある。他には平場の第3段、調査区北西の斜面や南端の平地で縄文時代の土坑(SK 198・199・224)や陥穴跡(SK 223)が検出されたほか、調査区西端の斜面では平面プランが一辺1m弱の隅丸方形を呈する土坑状の遺構が3基(SK X 216・219・220)並んで検出されている。

第2次調査で出土した遺物は整理箱で1箱分である。調査区頂上部の平場や北西側の斜面、南端の平地の土坑(SK 198・199・224)・ピット(SP 102)からは縄文時代の土器片や石斧・石皿などの石器が少量出土した。土器の遺存状態は不良で時期は不明である。また、調査区を横断する道路跡の周辺からは、須恵器系陶器片1点を含む中世~近世の陶磁器が出土しているが、数が少な

以上に遺存状態も悪い。西側斜面にて検出された3基の隅丸方形を呈する土坑状の遺構のうち1基(SX 219)の底部からは、ウマの骨(頸・歯・脚部)RX 19が出土している(第IV章)。

第3次調査で検出された主な遺構は、次の通りである。

曲輪跡は土層断面で7段を確認でき、山の形を利用し斜面を削って構築したことが判った。調査区南側の調査範囲外の部分が一層高くなっており、曲輪がもう一段あった可能性もある。曲輪確認のためのトレンチを掘った際、6段目から性格不明の落ち込みが1ヶ所検出された。曲輪2段目の平坦な場所からは、堅穴状遺構2棟(ST 301・302)が検出された。曲輪の斜面中腹からは炭灰跡3基(SQ 316・320・354)を検出した。しかし、3基とも大量の焼土と炭化物以外の遺物は出土していないため、遺構の成立時期は不明である。

遺物は、土器や石器が整理箱1箱分出土した。縄文時代の石器剥片、平安時代の須恵器片、中世の須恵器系陶器、近世陶磁器、銭貨(寛永通宝)などが、調査区全体から散在して出土した。

第4次調査で検出された主な遺構は、次の通りである。

7段の曲輪跡、土坑7基、そして柱穴17基を検出した。曲輪は旧地形である山の形を利用し、山側を削り谷側に盛り土をして7段分構築したことが、トレンチの断面からもそれぞれの曲輪上からも如実に窺い知ることができた。1段目の曲輪からは、土坑が2基と柱穴を4基検出した。また7段目の曲輪では、土坑を2基、柱穴を6基検出した。建物跡や横列を構成するような遺構は検出されなかった。

出土遺物としては、近世以降のものがほとんどで、瓦質土器の鉢の破片や陶磁器片、寛永通宝など整理箱にして1箱分にはいる。

3 検出遺構

A 曲輪跡

第3・4次調査で検出された7段分の曲輪跡である。

調査区は山の斜面にあり、平面形が扇形のような形状をしている。第4次調査で検出した7段ある曲輪跡の特徴は以下の通りである(第24図)。

1段目は調査区南端の頂上部にあり、高さは50mを

測る。平面形は東西10m、南北8mの台形状で、面積は約65㎡ある。主軸方向がN-20°-Wで、土坑や柱穴を5基検出した。

2段目は1段目から北側に下りた箇所であり、高さは48.7mを測る。平面形は東西14m、南北35mの不整な平行四辺形状で、面積は約49㎡ある。柱穴を2基検出した。

3段目は高さが47mを測り、東西17m、南北2mの細長い長方形形状である。遺構は検出できなかった。

4段目は東西に20m、南北に4mの不整な扇形である。面積は約80㎡で、東側約30㎡が西側より50cm程上った位置にある。上場から柱穴2基、下場から柱穴1基を検出した。

5段目は4段目の下の平場からそのまま下った箇所に位置する。東西に15m、南北に25mの平行四辺形状で、高さは43.3mである。土坑1基と柱穴2基を検出した。

6段目は上場の部分が5段目の平場から70cm程東側に下った箇所にあり、東西10m、南北3mの長方形形状で、面積は約30㎡、高さは42.5mである。下場の部分は、上場から西側へ50cm程下った5段目の平場の真下にあり、東西14m、南北2mの不整な長方形形状で、面積は約30㎡である。遺構は検出できなかった。

7段目は、西側半分が東側より70cm程高い位置にある。西側の平場は東西13m、南北15mの細長い平行四辺形状で、高さが40.4mである。3基の柱穴を検出した。東側の平場は東西15m、南北3mの不整な長方形形状で、4基の土坑と3基の柱穴を検出した。

B 掘立柱建物跡

S B 240 掘立柱建物跡 (第12図)

第2次調査で西側に形成されていた3段ある平場のうち、1段目平場の南東隅140～150-165-175グリッドで検出した。

S B 240は梁行2間、桁行3間の南北棟の建物で、主軸方向はN-55°-Eである。建物の規模は、梁行が32m、桁行3.8mを測り、面積は12.16㎡となる。柱間距離は梁行が北から1.6mずつ、桁行が北東から1.12m、1.32m、1.36mを測る。確認された柱穴は12基(E B 1～12)で、掘り方の平面形は18-32×22-60cmの円形または不整形で、深さは24-36cmである。柱

痕跡は確認できなかった。遺物の出土はない。

C 竪穴状遺構

S T 301・302 竪穴状遺構 (第22図)

いずれの遺構も第3次調査で検出した7段ある曲輪のうち、1番上の曲輪の南端から検出した。

S T 301は長辺4m・短辺2mの長方形で、8基の柱穴を伴っていた。基軸線はN-30°-Eであった。長辺は調査区外南側に延びているため、全容は不明である。

S T 302はS T 301に切られており、壁際に跡らしきものも検出されたが、規模や性格は不明である。柱穴を1基伴っていた。いずれも特定できる遺物が出土していないため、時期は不明である。確認された柱穴は9基(E B 303-309・311・S P 313)で、掘り方の平面形は径20-32cmの円形または不整な円形で、深さは10-60cmである。柱痕跡は確認できなかった。遺物の出土はない。

D 道路状遺構・陥穴跡

S F 250 道路状遺構 (第5-9図)

第2次調査で、調査区東端の山のみもとから3段ある平場の南東側を回り、調査区の南端に抜ける長さ約120m・幅1-4mの道路跡らしき遺構を検出した。

この道路は山の東側のふもとと、調査区の南側に位置する城郭の主体部を連絡する役割をもっていたものではないかと考えられる。

S K 223 陥穴跡 (第13図)

第2次調査区の南西端190-205グリッドで検出した。平面形は長径3.6m、短径0.4mの細長い不整な楕円形である。確認面からの深さは35cmで、底面も細長い不整な楕円形となる。遺構は伴わないが、周辺の土坑から縄文土器が出土しているため、縄文時代の陥穴ではないかと考えられる。

E 炭窯跡

第3次調査で炭窯跡と考えられる遺構を3基検出した。

S Q 316 炭窯跡 (第23図)

S Q 316は調査区南西側の斜面から検出した。長径1.4m、短径1mを測り、平面形も底面も不整な楕円形であ

る。2層目に焼土や炭化物を含み、床面から真っ赤に焼けた土を検出した。遺物の出土はない。

S Q 320 炭窯跡 (第23図)

S Q 320は調査区中央部の斜面から検出した。長径1.6m、短径1.4mを測り、平面形も底面も不整な楕円形である。4層目に焼土や多量の炭くずを含んでいた。遺物の出土はない。

S Q 354 炭窯跡 (第23図)

S Q 354は調査区北東端のEトレンチ内から検出した。長径0.8m、短径0.5mを測り、平面形も底面も不整な楕円形である。床面から焼土を検出した。遺物の出土はない。

F 土坑・性格不明遺構

S K 198 土坑 (第14図)

第2次調査で、調査区の北西端200-140グリッドで検出した。長径2m、短径1.5mを測り、平面形も底面も不整な楕円形である。確認面からの深さは40cmを測り、覆土からは縄文土器片が出土した。

S K 199 土坑 (第14図)

第2次調査区の北西側195-150グリッドで検出した。長径1.3m、短径1.1mを測り、平面形も底面も不整な円形である。確認面からの深さは約30cmを測り、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる。覆土からは、縄文土器片と石皿が出土した。

S K 224 土坑 (第14図)

第2次調査区の南西端190-205グリッドで検出した。縦横1mを測り、平面形も底面も円形である。確認面からの深さは約50cmを測り、断面形は急激に立ち上がる。底面近くから折損した磨製石斧が出土した。

S X 219 性格不明遺構 (第15図)

第2次調査区の西端、3段目平場の下斜面200-155グリッドで検出した。長辺1.6m、短辺1.2mを測り、平面形も底面も不整な長方形である。確認面からの深さは80cmで、底部から動物の骨(R X 19)が出土した。それらの骨は11-14才程度の成獣のウマの1個体のうち、大腿骨や下顎骨、寛骨(坐骨部分)の一部であるという理化学分析の結果を得た(第IV章)。このことから、この遺構は近世以降に、ウマを埋葬するために掘られたものではないかと考えられる。

4 出土遺物

出土遺物は、第2～4次調査で計43点出土した。

内訳は縄文土器2点、須恵器1点、陶磁器31点、瓦質土器2点、石器4点、銭貨2点、鉄滓1点である。遺構から出土したのはわずかに9点のみであり、大半が遺構外からの出土である。出土遺物全般に小破片であり、器形が復元できるものは非常に少なく、残存状態も不良のものが多いため、型式・器種を明確に判断できるものは少なかった。本遺跡の成立していた年代は文献等に記載がないため不明であるが、仮に本遺跡が武藤氏と最上氏の争乱に起因するものである場合、16世紀後半に位置付けられる。しかし、それより新しい遺物が大半である(第35～40図)。

1・2は縄文土器である。1はSK 198 F 2層から、2はSK 199 F 1層から出土した。いずれも小破片であり、摩耗が激しいため正確な型式・器種は不明であるが、1については縄文時代中期後半～後期前半の年代が考えられる。

3は須恵器の甕である。年代はおおむね9世紀代と考えられる。

4・5は珠洲産の須恵器系陶器で、4が播鉢、5が壺である。4はSD 170の155～180グリッドから出土した。年代としては、13～14世紀代と考えられる。なお川崎利夫によれば、前述した通り、付近に「城の下墳墓」と称する中世の墳墓があり、そこから「須恵器質蔵骨器」が2点出土している(川崎1958・1959)ことから、その関連も考えられ、本遺跡やその周辺に中世墳墓が存在していた可能性がある。

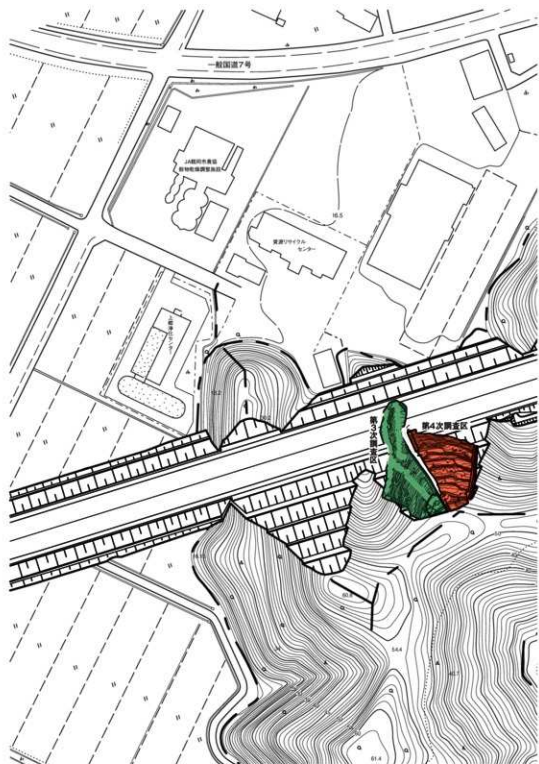
6～34は陶磁器である。多くが小破片であり、器形が復元できるものは極めて少ない。6・7は中国産の輸入磁器であり、器形は碗と思われる。6については漆接ぎによる接着痕が認められる。年代は6が16世紀末～17世紀初頭、7が16世紀後半と位置付けた。8～23は肥前系の陶磁器であり、それぞれ8が香炉、9が播鉢、10・12～15・19・20が碗、11・16が皿、17が小坏、18が鉢とした。年代は17～19世紀代と、近世から近代にかけてのものである。21～23の器種はすべて皿である。22は外面に施釉がなく、内面は銅緑釉による施釉が施されている。23は砂目積みの技法が用いられて

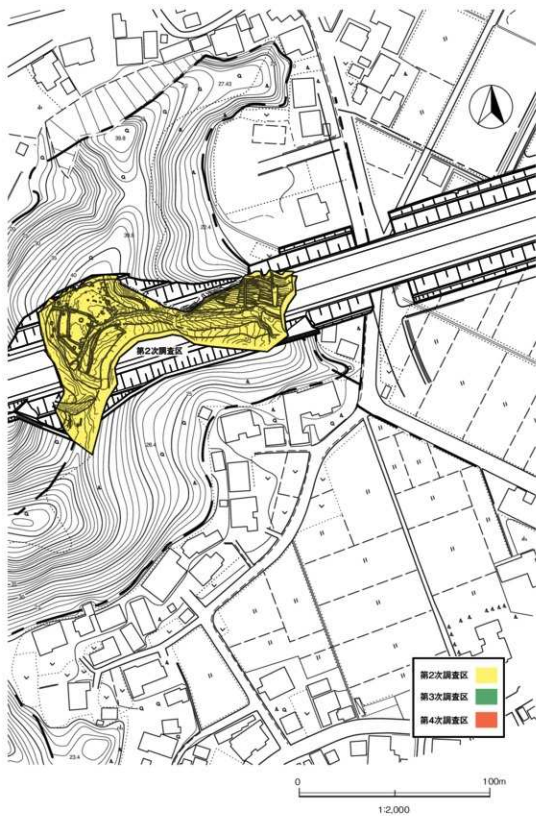
いる。24・25は瀬戸美濃の陶磁器である。24は折縁皿である。年代は16世紀末頃、大窯第4段階と考えられる。25は碗で、年代は19世紀以降と、比較的新しいものと思われる。26～29は、産地不明の陶器である。26はSD 140から出土し、底部に「口皿六十入」との墨書があり、器種は甕である。年代は19世紀以降と思われる。27は近世、28は19世紀以降の播鉢である。29は近世以降の甕と思われるが、小破片のため断定はできない。30は磁器の合子である。内面に漆の付着痕が確認できる。楕円形状の器形を呈していると思われる。産地は中国と推定され、年代は中世と思われる。31は磁器の碗である。小破片のため特定するのは難しいが、瀬戸産と思われる。年代は19世紀以降か。32は陶磁器である。産地及び器種は小破片のため特定できないが、瀬戸美濃で、形態から瓶類の可能性もある。年代は19世紀以降か。33・34は白磁である。小破片のため特定するのは難しいが、碗か皿の可能性もある。年代は近世としておく。35・36は瓦質土器である。35は火鉢である。口縁の一部が残っているのみである。36はクロク目が顕著に確認できる。器種は鉢であろうか。年代は中世～近世と、幅をもたせておきたい。

37～40は石器である。37は石皿で、扁平な川原石の一面に磨痕を持っている。38は磨石であり、川原石を用いている。39は磨製石斧であり、刃部は残存しているものの、基部は折損している。40は削器としたが、折損しているため石匙や石槍の可能性もある。メノウ製で、刃部の両面に加工痕が見られる。

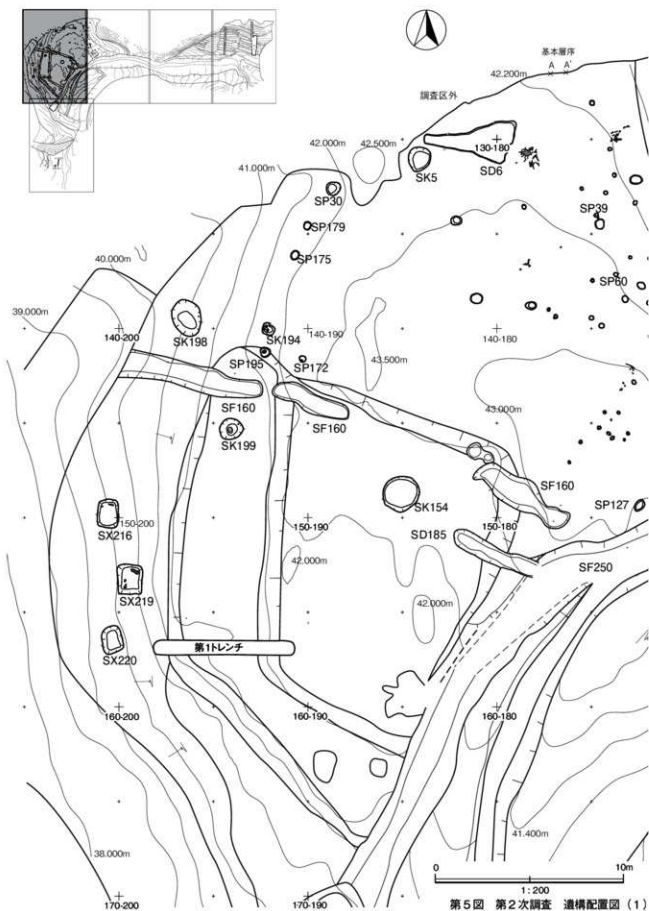
41・42は銭貨で、銭銘は寛永通宝である。42については四文銭として流通した波銭であり、「十一波」が刻まれている。このことから42の年代は18～19世紀となる。

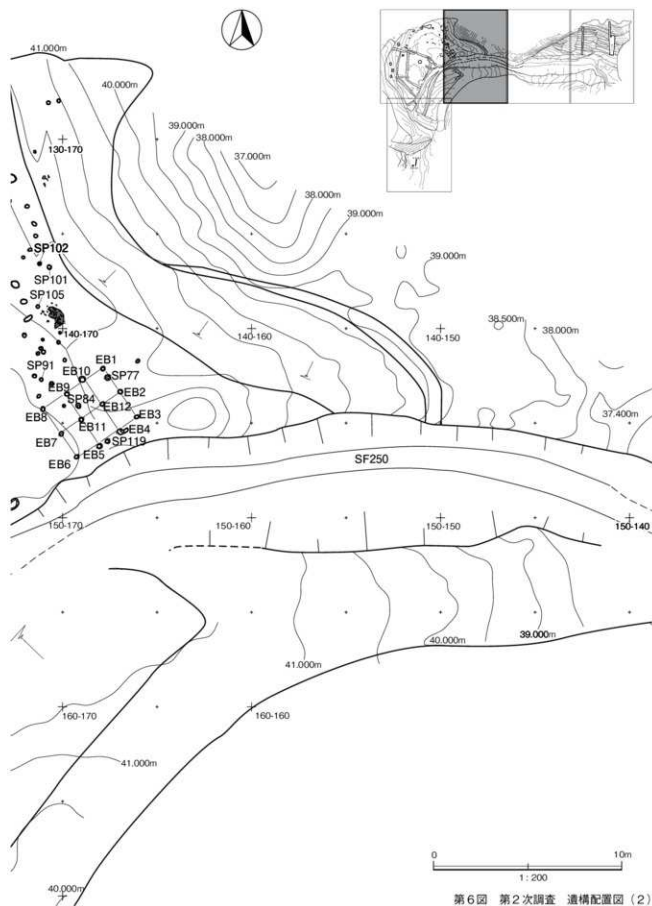
43は鉄滓である。第3次調査で炭塵跡を検出したことから、付近に製鉄・鍛冶関連の遺構が存在する可能性が考えられる。

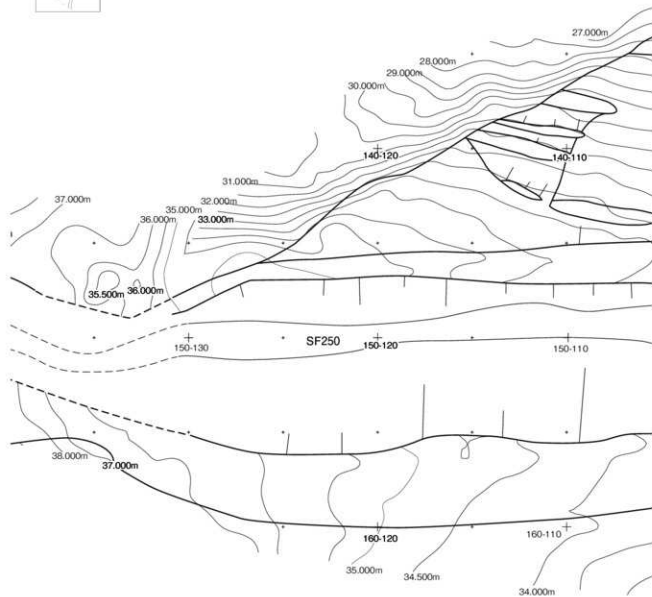
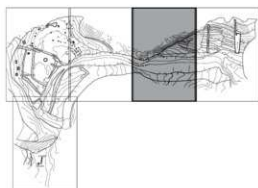




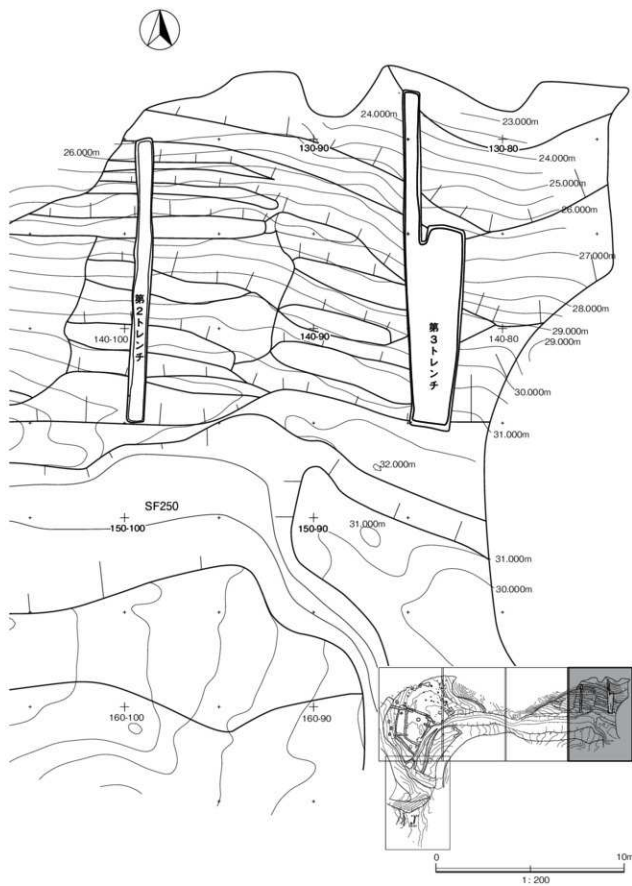
第4図 調査区概要図



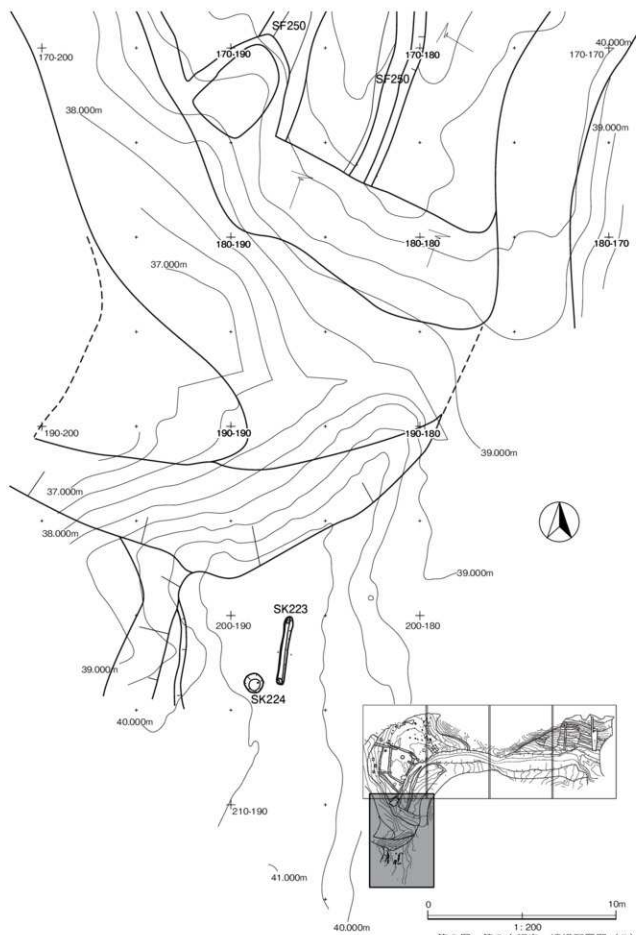




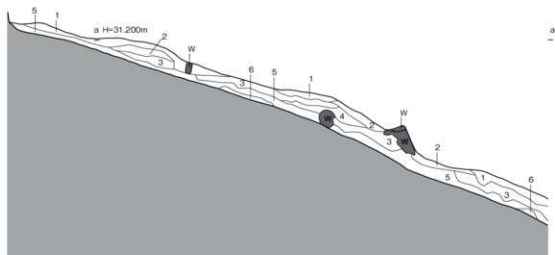
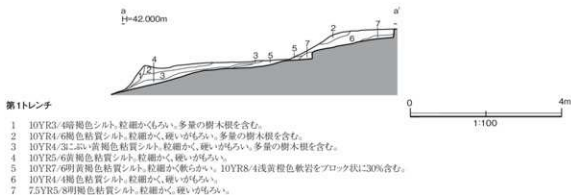
第7図 第2次調査 遺構配置図(3)



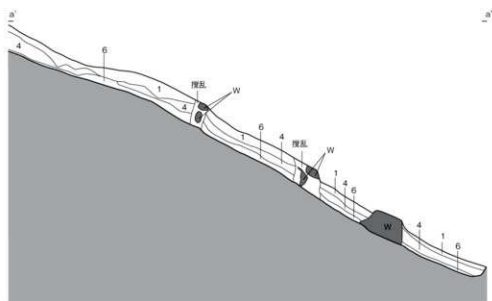
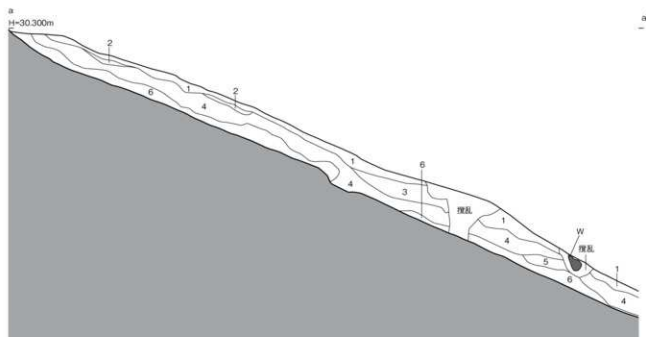
第8図 第2次調査 遺構配置図(4)



第9図 第2次調査 遺構配置図(5)

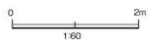


第10図 第2次調査 トレンチ土層断面図(1)

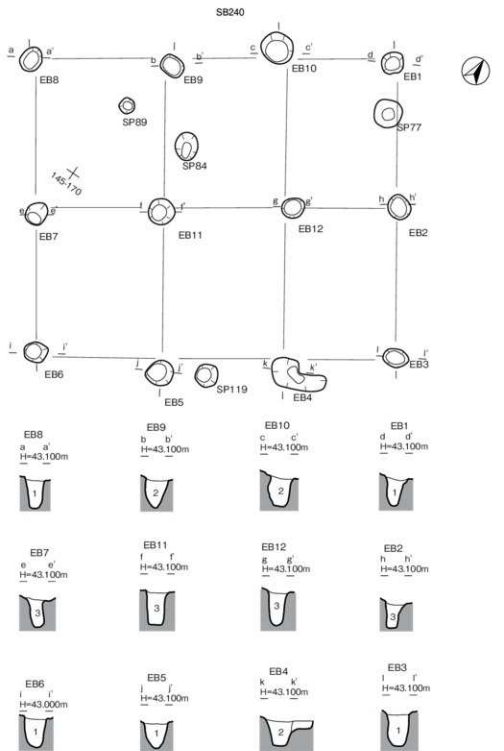


第3トレンチ

- 1 7.5YR3/2黒褐色腐植質シルト、粘り少ない、植物根による擾乱多い。
- 2 7.5YR3/3暗褐色腐植質シルト、粘り少ない、粒大きい、植物根による擾乱多い。
- 3 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト、粘りあり、腐植質シルト含む、細砂が少量混じる。
- 4 7.5YR4/3褐色粘質シルト、粘りあり、細砂少量混じる、漸移層。
- 5 10YR6/6明黄褐色粘質シルト、硬くまるが粘りあり。
- 6 2.5Y5/6黄褐色粘質シルト、硬くまるが粘りあり。



第11図 第2次調査 トレンチ土層断面図(2)

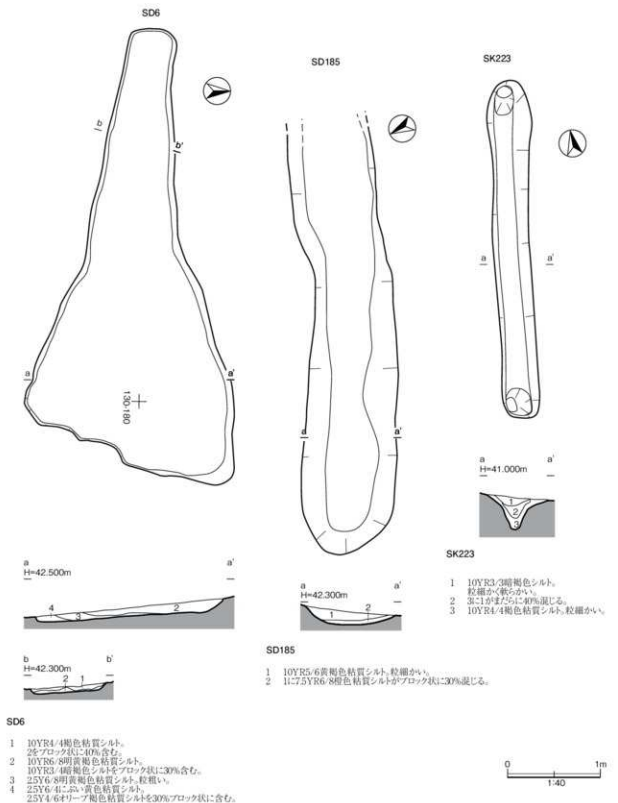


SB240 EB1~EB12

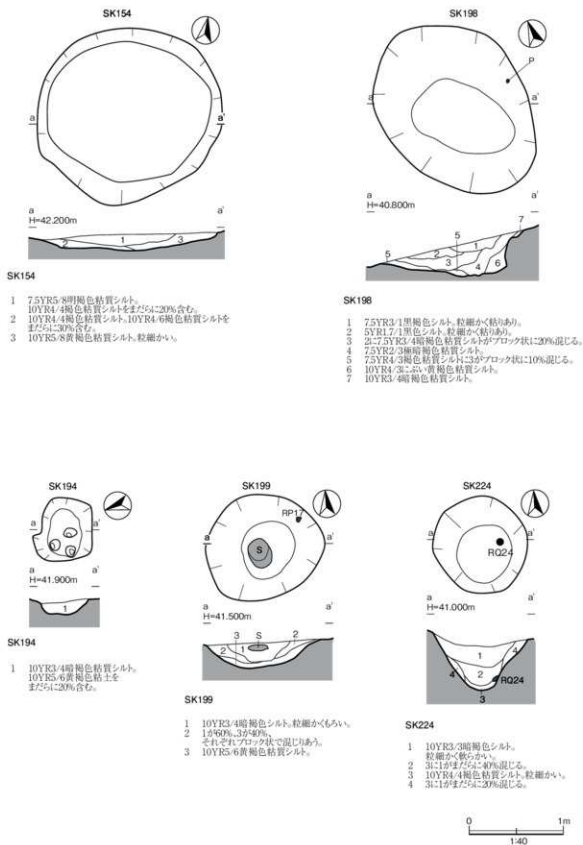
- 10YR4/3こいい黄褐色粘質シルト、粒細かく軟らかい、N1.5/黒色炭化物を3~10mmの方形の粒状に10~40%含む。
- 10YR4/6褐色粘質シルト、炭化物を径3~5mmの粒上に3%含む。
- 10YR4/3こいい黄褐色粘質シルト、粒細かく、10YR2/2黒褐色粘質シルトがほがらに40%、径3~10mmのN1.5/黒色炭化物が粒状に10~20%混じる。



第12図 SB 240 掘立柱建物跡

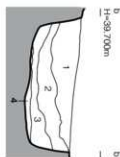


第13図 SD6・185溝跡、SK223陥穴跡



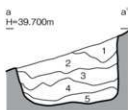
第14図 SK154・194・198・199・224土坑

SX216

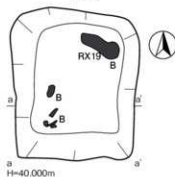


SX216

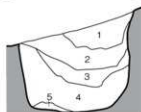
- 1 10YR3/2暗褐色シルト
- 2 10YR6/8明黄褐色粘質シルト
10YR3/3暗褐色シルトをまだらに30%含む
- 3 10YR3/4暗褐色シルト
- 4 10YR6/8明黄褐色粘質シルトをまだらに50%含む
10YR5/8黄褐色粘質シルト
- 5 10YR3/3暗褐色シルトをまだらに30%含む
10YR5/4こぶい黄褐色粘質シルト
3をまだらに20%含む



SX219



H=40.000m



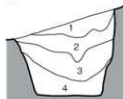
SX219

- 1 10YR3/4暗褐色シルト、粒細かく粘土
- 2 10YR4/6褐色粘質シルトをブロック状に10%含む
- 3 7.5YR5/8明褐色シルト、1をブロック状に30%含む
- 4 10YR5/8黄褐色粘質シルト
- 5 7.5YR2/1黒色シルト、粒細かく粘りあり。(骨出土)

SX220

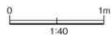


H=39.600m

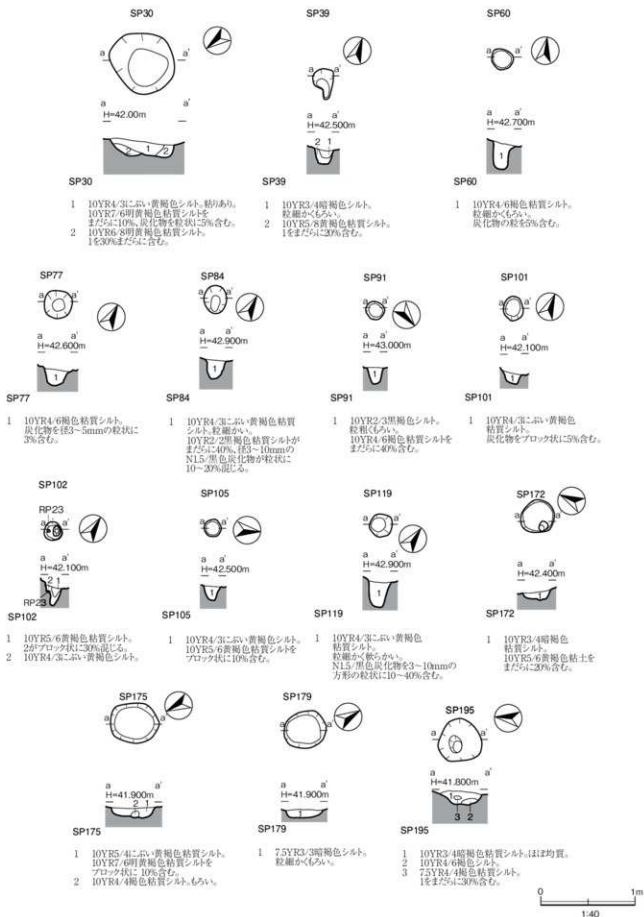


SX220

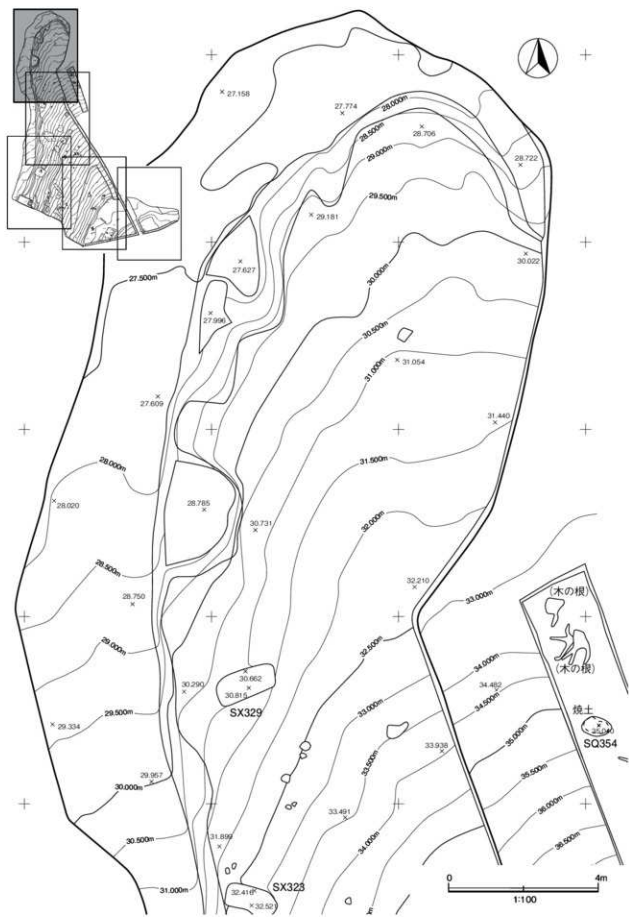
- 1 10YR4/6褐色粘質シルト、10YR3/3暗褐色シルトをまだらに30%含む
- 2 10YR3/4暗褐色シルト、10YR6/8明黄褐色粘質シルトをまだらに30%含む
- 3 10YR5/8黄褐色粘質シルト、10YR3/3暗褐色シルトをまだらに30%含む
- 4 10YR5/6黄褐色粘質シルト、10YR3/3暗褐色シルトをまだらに30%含む



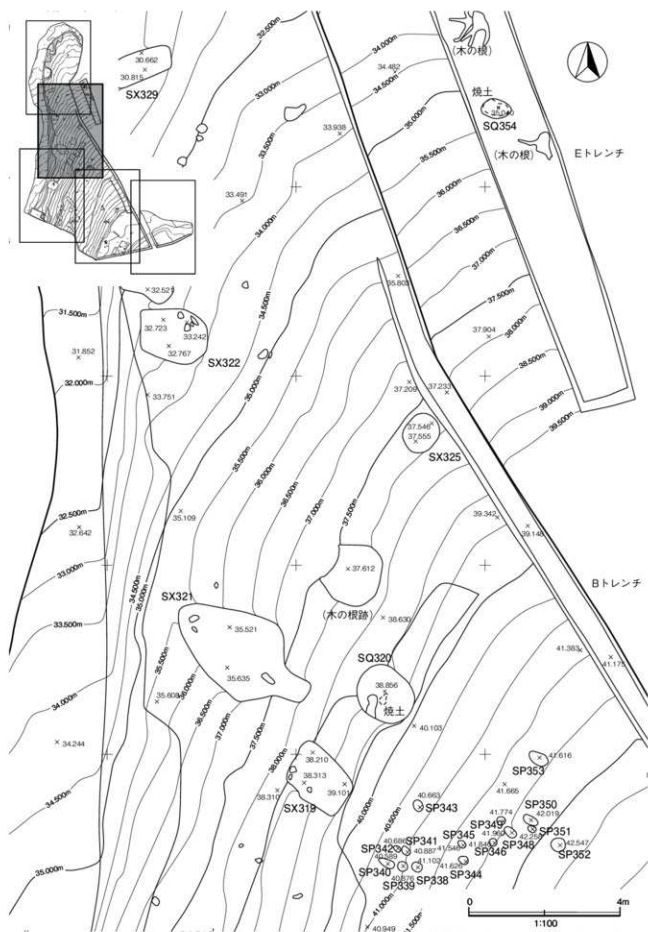
第 15 図 SX 216・219・220 性格不明遺構



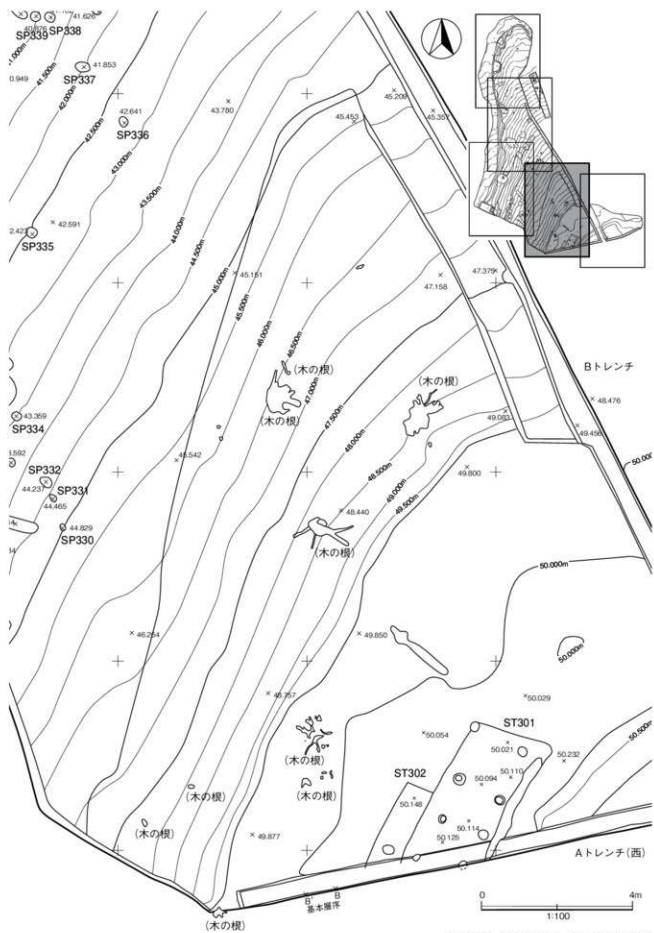
第16図 第2次調査検出ピット



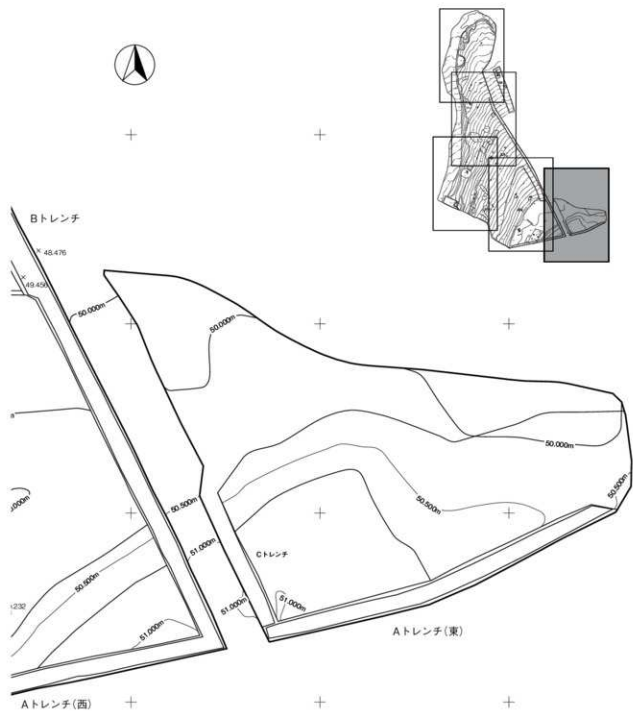
第17図 第3次調査 遺構配置図(1)



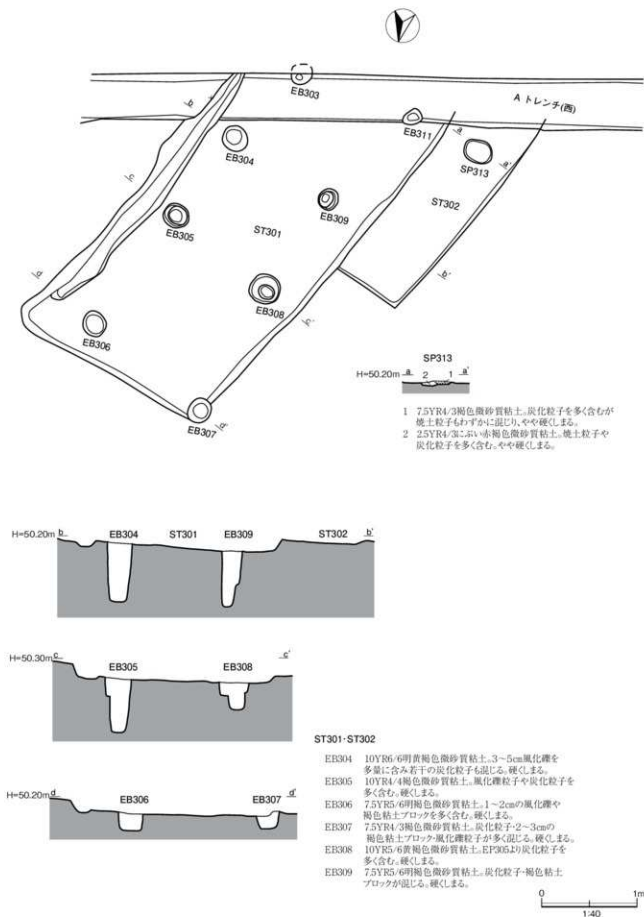
第18図 第3次調査 遺構配置図(2)



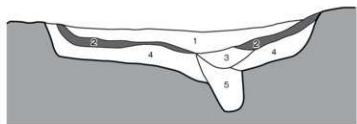
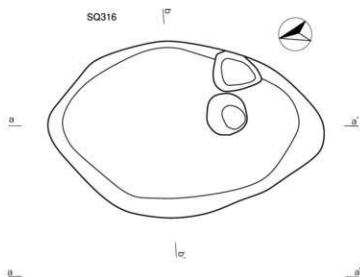
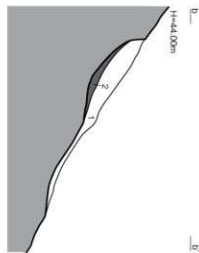
第20図 第3次調査 遺構配置図(4)



第 21 図 第 3 次調査 遺構配置図 (5)

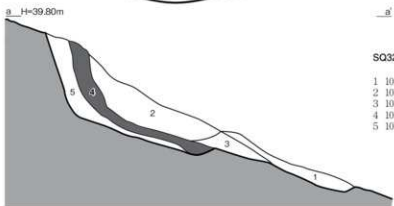
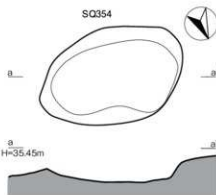
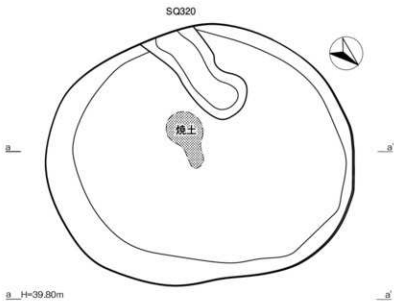


第 22 図 ST 301・302 竪穴状遺構



SQ316

- 1 10YR4/3に灰・黄褐色粘土。1cm程の風化礫を少量含む。足窗使用後に被さった土。
- 2 10YR4/4褐色シルト。焼土・炭化物を含む。
- 3 10YR4/6褐色シルト。計1cmの風化礫が少量混じる。
- 4 5YR5/8明赤褐色微砂質粘土。計3~10cmの風化礫が混じる。
- 5 10YR4/3に灰・黄褐色シルト。1cm程の風化礫を少量含む。

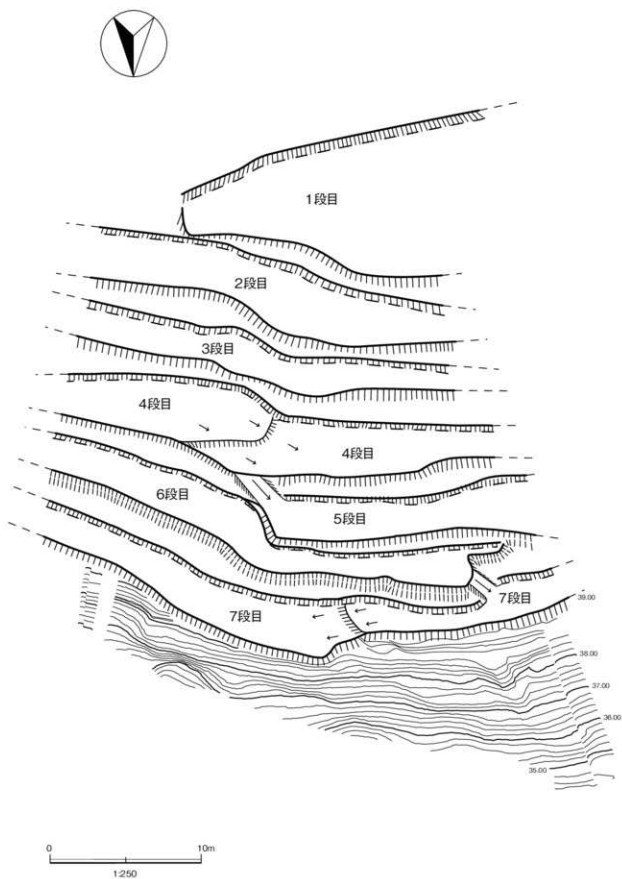


SQ320

- 1 10YR3/2暗褐色シルト。
- 2 10YR3/4暗褐色粘土。
- 3 10YR4/4褐色粘土。炭化物を少量含む。
- 4 10YR4/4褐色粘土。焼土・炭化物を多く含む。しまる。
- 5 10YR5/6黄褐色粘土。褐色粘土が少量混じる。



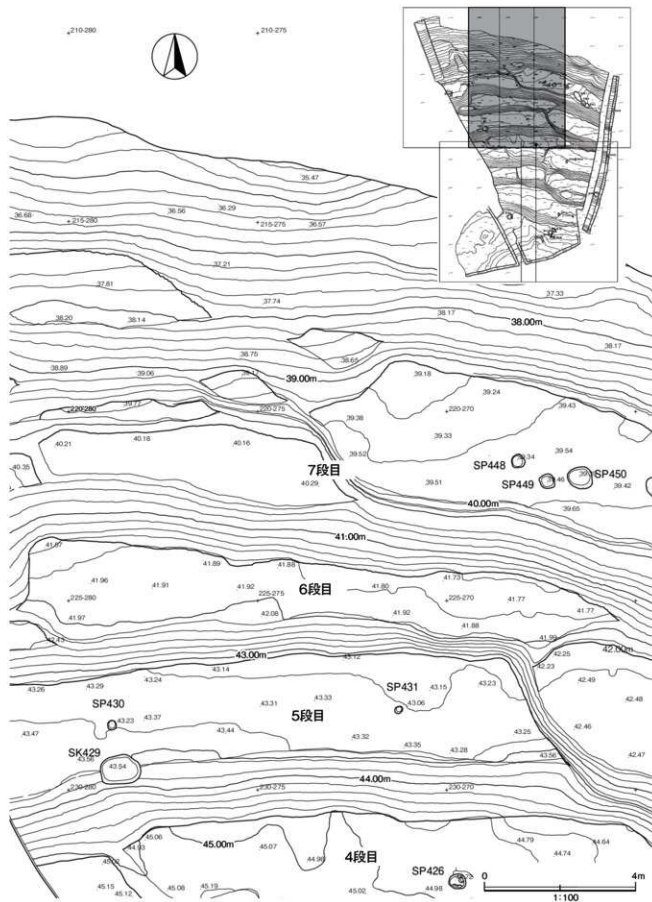
第23図 SQ 316・320・354 炭窯跡



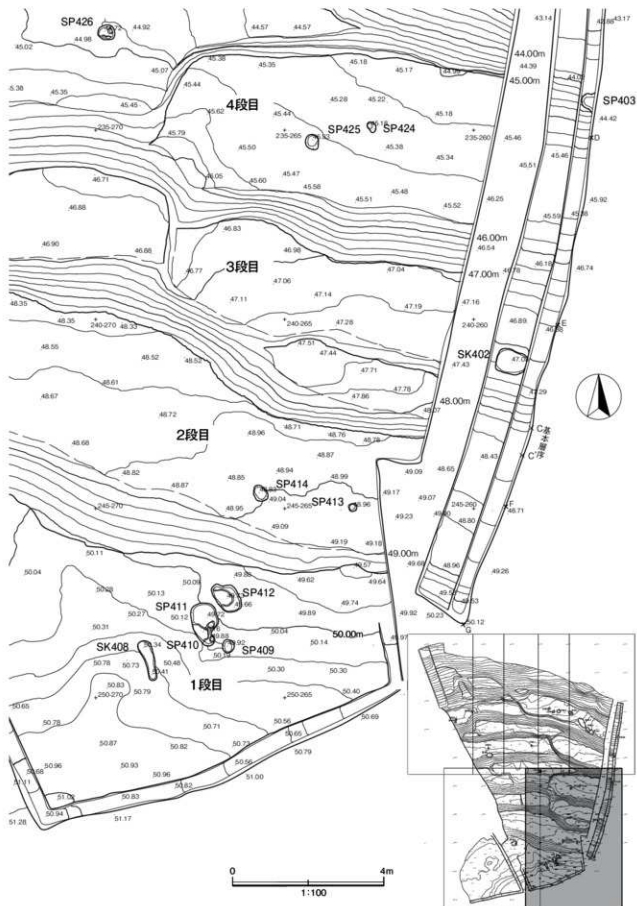
第 24 図 第 4 次調査区縄張図



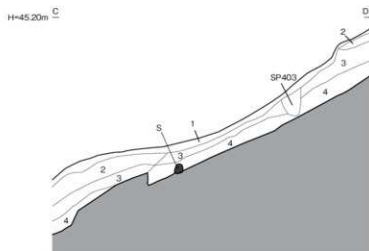
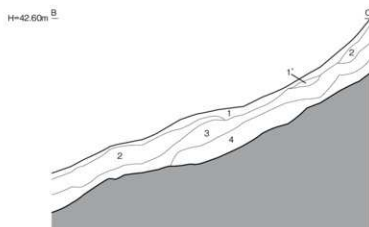
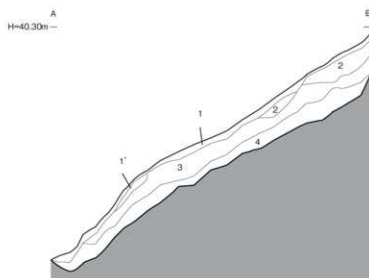
第 25 図 第 4 次調査 遺構配置図 (1)



第26図 第4次調査 遺構配置図(2)



第29図 第4次調査 遺構配置図(5)

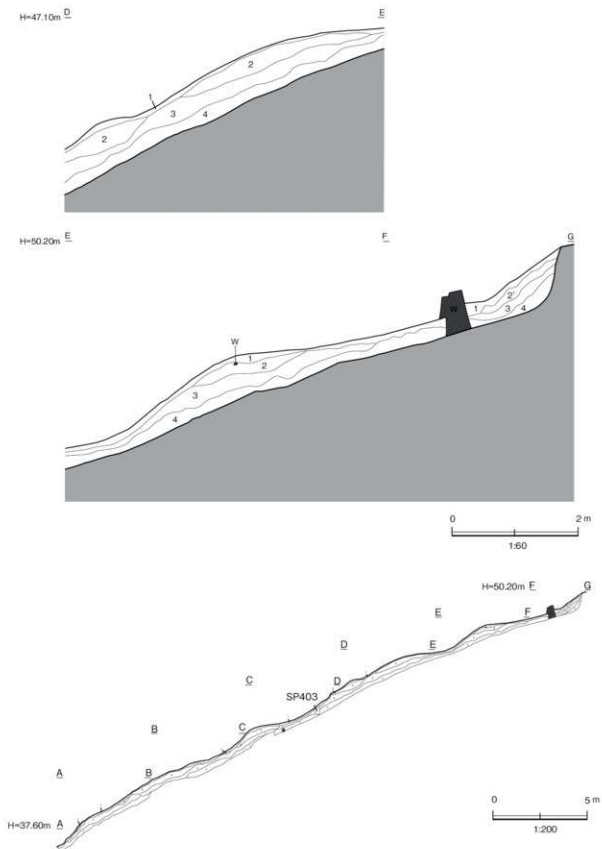


- 1 25Y4/1 黄灰色シルト。植物根を多数含む。しまり強く軟らかい。
表土。
1' 25Y3/1 茶褐色シルト。しまり弱く軟らかい。腐植土。
2 25Y3/2 暗灰黄色シルト。25Y4/1よりブ褐色結核シルト。
10YR3/1 黒褐色シルト（腐植土）をブロック状に少量含む。
硬くしまる。整地層（盛土）。
2' 10YR5/2 灰黄褐色シルト。しまる。
3 10YR5/1 褐灰色シルト。硬くしまる。整地層（切土）。
4 25Y6/8 明黄褐色粘土。粘性強く硬くしまる。地山。

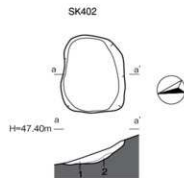


第30図 第4次調査トレンチ土層断面図(1)

Ⅲ 調査の成果

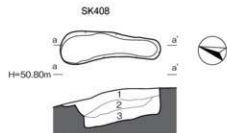


第 31 図 第 4 次調査トレンチ土層断面図 (2)



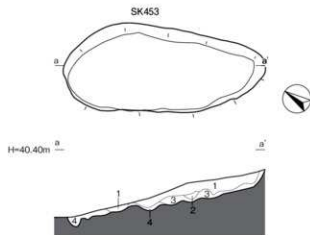
SK402

- 10YR3/4 暗褐色シルト。炭微量含む。根毛少量含む。
径1～3mm大の10YR6/8明黄褐色粗砂を微量に含む。しまりあり。
- 10YR4/4 褐色粘質シルト。根毛少量含む。しまりあり。



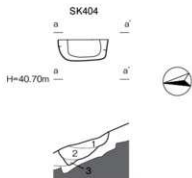
SK408

- 10YR4/4 褐色シルト。根毛少量含む。しまりあり。
径10mm大の明黄褐色礫を少量含む。
- 10YR5/8 黄褐色粘土。しまりあり。
- 10YR3/4 暗褐色シルト。根毛少量含む。しまりあり。



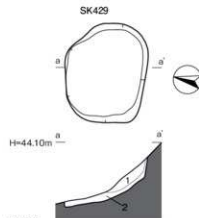
SK453

- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト。
10YR6/4 にふい黄褐色シルトを高状に少し含む。しまりあり。
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
- 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト。しまり弱く軟らかい。



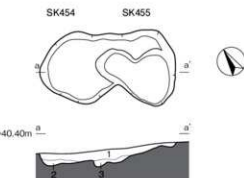
SK404

- 10YR4/2 灰黄褐色シルト。
3～5mmの炭化物を少量含む。粘性強く軟らかい。
- 10YR2/2 黒褐色シルト。
3～5mmの炭化物を多く含む。しまりが軟らかい。
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト。
1～3mmの粗砂を多く含む。しまり弱く軟らかい。



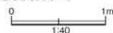
SK429

- 10YR4/6 褐色粘質シルト。
10YR6/8 明黄褐色の1mm大の粗砂を少量含む。
根毛少量含む。しまりあり。
- 10YR3/4 暗褐色シルト。根毛多量に含む。しまりあり。

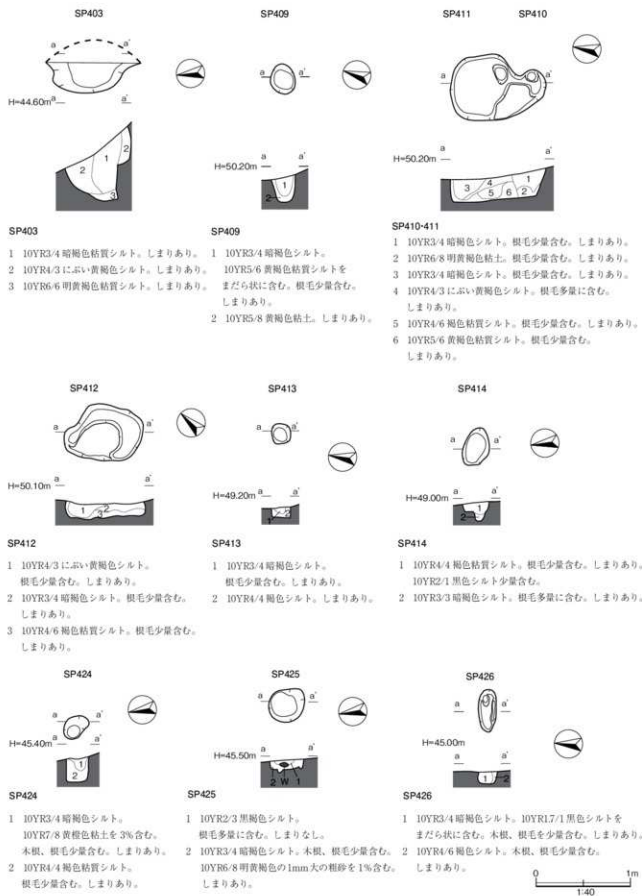


SK454-455

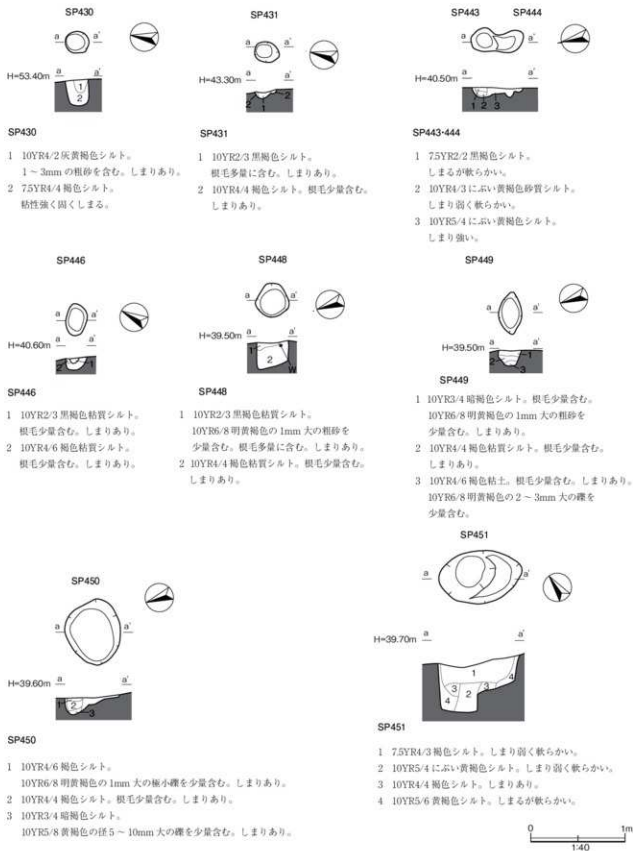
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルト。
10YR4/4 褐色粘質シルトをまだら状に多く含む。しまりあり。
- 10YR3/4 暗褐色シルト。粘性強いが軟らかい。
- 10YR5/6 黄褐色粘質シルト。しまりが軟らかい。



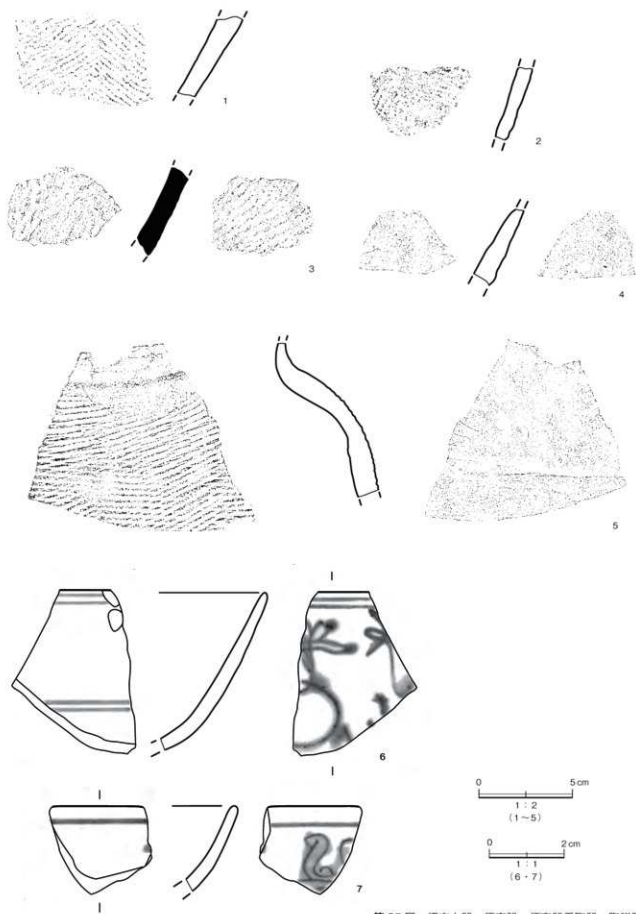
第32図 SK 402・404・408・429・453・454・455 土坑



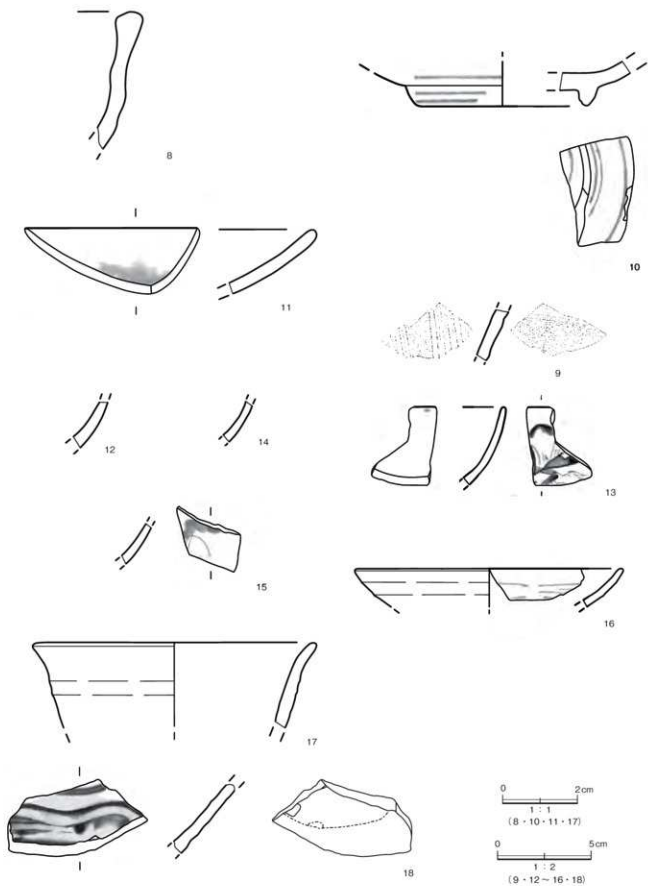
第33図 第4次調査検出ピット(1)



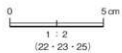
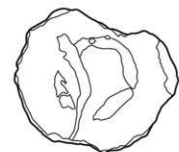
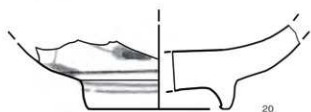
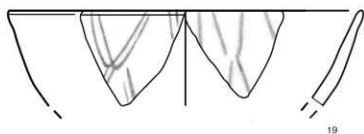
第34図 第4次調査検出ピット(2)



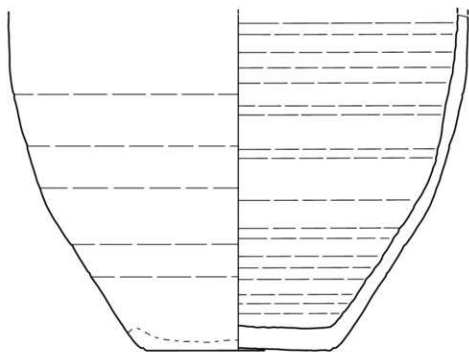
第35図 縄文土器・須恵器・須恵器系陶器・陶磁器



第36図 陶磁器



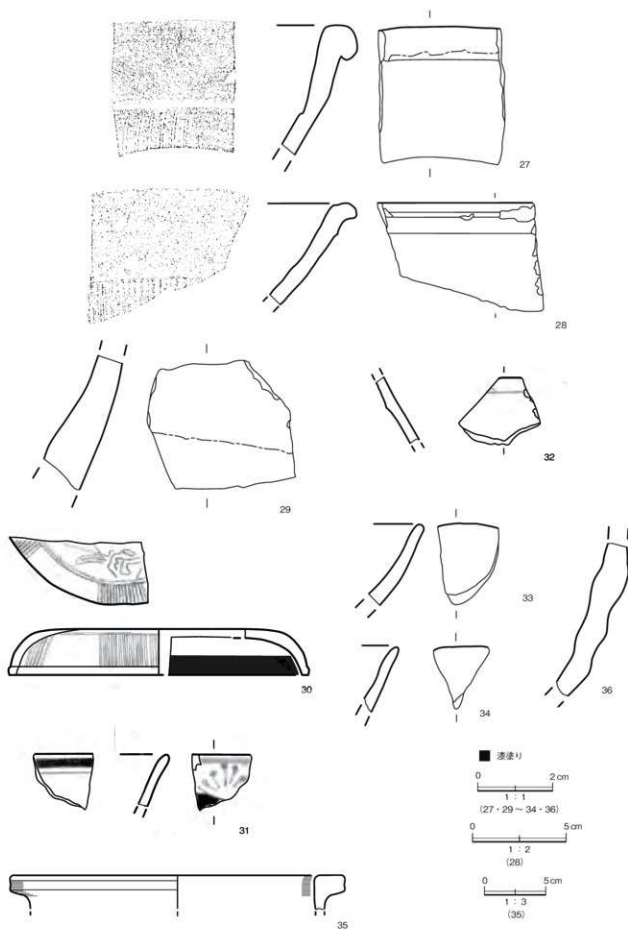
第 37 図 陶磁器



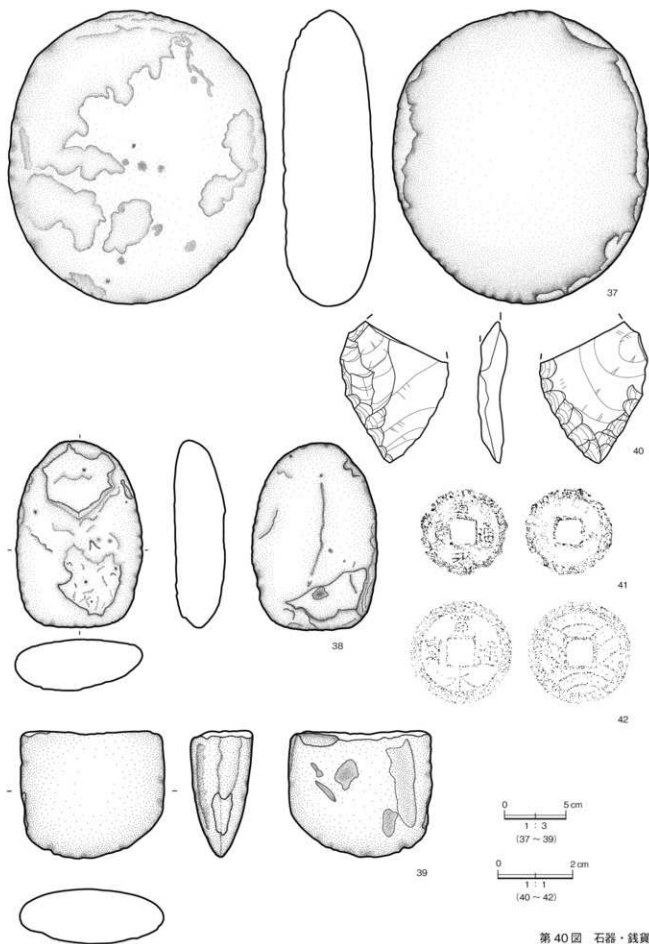
26



第 38 図 陶磁器



第39図 陶磁器・瓦質土器



第40図 石器・銭貨

表2 遺物観察表

※単位はmm。()は推定値、〈 〉は残存値を表す。											
No.	種別	器種	年次	出土位置	登録番号	口径	底径	器高	器厚	底部調整	備考
1	縄文土器		2次	SK198 F2				(49)	10		縄文時代中期前半～ 後期前半
2	縄文土器		2次	SK199 F1	RP17			(37)	7		
3	須恵器	甕	3次		RP36			(49.5)	9		9c
4	陶器	撥鉢	2次	SD170 155-180				(47)	9		13～14c(珠洲)
5	陶器	甕	3次		RP35			(90.5)	11		13～14c 中世陶器(珠洲)
6	組器	碗	2次		RP22			(51)	3		16c末～17c始 中国産 漆掻き
7	組器	碗	2次	155-185 II				(25)	2.5		16c後半 中国産
8	陶器	香炉	3次	X-O				(36)	4.5		17位 肥前
9	陶器	撥鉢	2次	SD170				(29)	5.5		17～18c 肥前か
10	組器	碗	2次	155-185 II			44	(14)	3.5		17～18c 肥前
11	陶器	皿	3次		RP24			(28)	2.9		17～18c 肥前
12	組器	碗	3次		RP25			(26)	5.5		18c以降 肥前
13	組器	碗	3次		RP26			(44.5)	4		18～19c 肥前
14	組器	碗	3次		RP28			(22)	3.5		18～19c 肥前
15	組器	碗	3次	X-O				(41.5)	4		18～19c 肥前
16	組器	皿	2次	155-190		(140)		(20)	3.5		18～19c 肥前
17	陶器	小坏	2次	155-190		(74)		(22)	3		18～19c 肥前
18	陶器	鉢	2次		RP3			(51)	5		19c 肥前
19	組器	碗	4次	230-280 II		(94)		(25)	3		近世 肥前
20	組器	碗	4次	230-275			(38)	(22)	8		近世 肥前
21	陶器	皿	2次	SD170				(21.5)	4		16c末～17c前 肥前
22	陶器	皿	3次	X-O				(36.5)	4		18c 銅緑釉 肥前
23	陶器	皿	3次		RP23		(31)	(18.5)	7	高台付	1610～1630 肥前 砂目積み
24	陶器	皿	4次	225-285 II				(14.5)	6.5		中世 瀬戸
25	組器	碗	3次		RP31			(36.5)	5		19c以降(瀬戸か)
26	陶器	甕	2次	SD140	RP20		142	(261)	10		19c以降(近世)
27	陶器	撥鉢	4次	240-280 II				34	10		近世
28	陶器	撥鉢	2次		RP2			(71)	8		19c以降(在地形)
29	陶器	甕	4次	240-280 II				(36.5)	5		近世以降
30	組器	合子	4次	240-280				(12)	3		中世 中国産か
31	組器	碗	2次	SK206				(17)	2.5		19c以降 瀬戸
32	陶組器	瓶	3次		RP21			(29)	3.8		19c以降 瀬戸
33	組器	小碗	4次	トレンチ				(23)	3.5		近世 白磁
34	組器	小碗	4次	240-260				(18)	3		近世 白磁
35	瓦質土器	鉢	4次	245-275		(264)		(27)	10		17～18c
36	瓦質土器	鉢	4次	245-270 II				(41)	6		
37	石器	石皿	2次	SK199			長さ 229	幅 203	厚さ 71		安山岩
38	石器	磨石	2次	155-190			長さ 146	幅 99	厚さ 40		安山岩
39	石器	磨製石斧	2次	SK224	RQ24		長さ 66	幅 72	厚さ 32		安山岩
40	石器	削器か	2次		RQ1		長さ 32	幅 31	厚さ 6		メノウ
41	鉄貨	寛永通宝	3次		RM33						17～18c
42	鉄貨	寛永通宝	4次	245-270 II							波鏡
43	鉄洋		4次	X-O							重さ43g

IV 理化学分析

1 土坑内土壌のリン・カルシウム分析

株式会社パレオ・ラボ

A はじめに

第2次調査で、近世以降と思われる土坑が検出された。ここでは、骨の代表的な成分であるリンとカルシウムに注目して、土坑内土壌のリン含有量とカルシウム含有量を調べた。

B 試料

試料は、S X 216、S X 219、S X 220の各土壌と比較試料地山土壌の合計13試料である(表3)。各試料は、約5g程度を採取して現生植物根を目視で除去した後、恒温乾燥機で80℃、48時間乾燥した。

これら試料は、アルミナ乳鉢を用いて粉末化した後、塩化ビニール製のリングに充填し、油圧プレスを用いて20トン加圧整形し測定用ブリケットを作成した。測定は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX(PW2424型)を用いて定量分析を行った。測定元素は、酸化ナトリウムNaO、酸化マグネシウム

MgO、酸化アルミニウムAl₂O₃、酸化ケイ素SiO₂、酸化リンP₂O₅、酸化イオウSO₂、酸化カリウムK₂O、酸化カルシウムCaO、酸化チタンTiO₂、酸化マンガンMnO、酸化鉄Fe₂O₃の11元素である。なお、定量計算は、FP法(ファンダメンタルパラメータ法)である。

C 結果

表4に土壌の分析結果を示す。比較試料の地山試料では、リン含有量が0.252%、カルシウム含有量が0.27%であった。S X 216では、リン含有量が0.051-0.663%、カルシウム含有量が0.11-0.20%であった。地山試料と比較した場合、層位F4(№4)においてリン含有量が0.663%と高い値を示す。ただし、この層位におけるカルシウム含有量は0.12%と特に高い値は示さない。骨成分を反映している可能性はあると思われる。むしろ層位F2(№2)が0.20%と若干高い値ではあるが、地山試料よりは低い値である。S X 219では、リン含有量が0.033-5.141%、カルシウム含有量が0.07-2.95%であった。地山試料と比較した場合、層位F5(№9)においてリン含有量が5.141%、カルシウム含有量は2.95%と高い値を示している。リンおよびカルシウム含有量ともに高

表3 分析試料とその特徴

試料No.	遺構番号	層位	遺構の性格	遺構の時代観	色調	特徴
1	SX216	F1	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	灰黄色、10YR 5/2	粘土、現生根入る
2	SX216	F2	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	灰黄色、10YR 6/2	粘土、現生根入る
3	SX216	F3	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	浅黄色、2.5Y 7/4	粘土、現生根入る
4	SX216	F4	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	にぶい黄色、2.5Y 6/3	粘土、現生根入る
5	SX219	F1	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	にぶい黄色、2.5Y 6/4	粘土、現生根入る
6	SX219	F2	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	にぶい黄褐色、10YR 6/3	粘土、現生根入る
7	SX219	F3	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	明黄褐色、10YR 6/6	粘土、現生根入る
8	SX219	F4	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	明黄褐色、10YR 6/6	粘土、現生根入る
9	SX219	F5	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	にぶい黄色、2.5Y 6/3	粘土、現生根入る
10	調査地区内地山 比較試料				オリーブ褐色、2.5Y 4/3	シルト質粘土、現生根入る
11	SX220	F2	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	にぶい黄褐色、10YR 6/3	粘土、現生根入る
12	SX220	F3	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	にぶい黄褐色、10YR 5/3	粘土、現生根入る
13	SX220	F4	不明(動物を埋葬した穴か)	近世以降か	にぶい黄色、2.5Y 6/4	粘土、現生根入る

い値を示すことから、骨成分を反映している。なお、この土坑の層位F4～F5からは、動物（ウマ）の下顎骨などが出土している。

SX220では、リン含有量が0.054-0.069%、カルシウム含有量が0.08-0.12%であった。地山試料と比較した

場合、いずれの層位においてもリン含有量およびカルシウム含有量は高い値は示さないことから、骨成分は検出されない。

表4 土坑内土壌の分析結果 (FP法)

No.	遺構No.	層位	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	TOTAL
1	SX216	F1	0.29	1.52	20.01	69.03	0.057	0.08	1.76	0.15	1.09	0.026	6.00	100.00
2	SX216	F2	0.47	1.26	17.46	72.01	0.069	0.10	1.79	0.20	1.15	0.023	5.47	100.00
3	SX216	F3	0.24	1.60	21.68	66.85	0.051	0.07	1.69	0.11	1.02	0.026	6.67	100.00
4	SX216	F4	0.20	1.74	23.65	65.19	0.063	0.10	1.27	0.12	0.88	0.019	6.18	100.00
5	SX219	F1	0.31	1.52	21.66	67.00	0.071	0.11	1.62	0.12	1.02	0.021	6.56	100.00
6	SX219	F2	0.21	1.88	24.02	63.86	0.059	0.09	1.52	0.10	0.92	0.019	7.31	100.00
7	SX219	F3	0.09	1.94	25.42	63.34	0.033	0.08	1.34	0.07	0.86	0.015	6.81	100.00
8	SX219	F4	0.14	1.97	24.67	63.29	0.046	0.08	1.41	0.09	0.85	0.015	7.45	100.00
9	SX219	F5	0.15	1.77	23.30	58.10	0.141	0.13	1.35	0.25	0.87	0.017	6.21	100.00
10	調査地区内地山		0.38	1.38	19.67	67.22	0.252	0.21	1.91	0.27	1.16	0.038	7.52	100.00
11	SX220	F2	0.17	1.86	23.11	65.29	0.069	0.07	1.46	0.12	0.96	0.015	6.88	100.00
12	SX220	F3	0.20	1.91	23.49	64.56	0.069	0.09	1.49	0.11	0.96	0.017	7.10	100.00
13	SX220	F4	0.11	1.76	23.08	65.43	0.054	0.08	1.56	0.08	0.91	0.011	6.93	100.00
		最小値	0.09	1.36	17.46	58.10	0.033	0.07	1.27	0.07	0.85	0.011	5.47	
		最大値	0.47	1.97	25.42	72.01	0.141	0.21	1.91	0.25	1.16	0.038	7.52	

2 木の下館跡出土動物遺体同定

株式会社バレオ・ラボ

A 対象試料・同定結果および考察

第2次調査で、動物遺体が西側斜面に位置する隅丸方形のSX219から検出された。ここではSX219から検出された動物遺体を用いて動物遺体の観察を行い、同定し、必要に応じて計測をおこなった。なお、出土した動物遺体についての詳しい出土内容および歯の計測値については、表5に示す。同定した結果を以下に述べる。

B ウマ

SX219からはウマの下顎骨、四肢骨が出土している。下顎骨は、脆弱で欠損しているが、臼歯はすべて残存している。脆弱であるため、残存している臼歯を下顎骨から破損せずに取り出すことは困難である。しかし、歯根中心部が下部より確認できる臼歯も存在するため、そのような臼歯を用いて全歯高（歯根中心部と咬合面中心部の直接距離）の計測をおこなった(表6)。その結果より、出土したウマの年齢は、およそ11～14才程度の成獣個体と推定される。

表5 SX219出土動物遺体産出表

遺物番号	遺構名	層位	種名	左右	部位	状態	備考
RX19-1	SX219	F4～F5	ウマ	右	大腭骨	大腭骨頭	
RX19-2					不明	骨砕破片	
RX19-3				左	下顎骨		第2前臼歯～第3後臼歯 全臼歯列長 1532 mm 前臼歯列長 782 mm 後臼歯列長 748 mm
RX19-4				右	寛骨	坐骨部	

そのほかにも寛骨、大腿骨の破片が検出されている。また、部位不明の骨幹破片が検出されているが、同じ土坑の同一層位から検出されており、その保存状態も近似していることから同様にウマのものと考えられる。

C まとめ

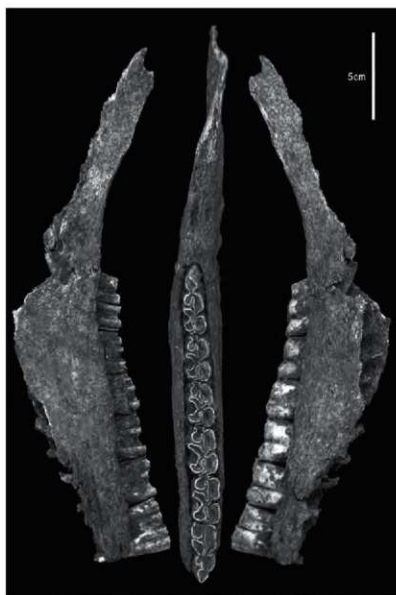
木の下館跡から出土した動物遺体を同定した結果、ウマが1個体検出され、そのウマは11～14才程度の成獣個体であった。

表6 SX 219 検出ウマ下顎歯の全歯高計測値

	第2前臼歯 P ₂	第3前臼歯 P ₃	第4前臼歯 P ₄	第1後臼歯 M ₁	第2後臼歯 M ₂	第3後臼歯 M ₃
左	計測不可	25.4	36.4	計測不可	31.0	29.5

引用文献

久保和士・松井章(1999)第9章家畜(その2-ウマ・ウシ)、西本豊弘・松井章編「考古学と動物学」, pp.169-208



第41図 SX219出土ウマ下顎骨(左から 内側面, 上面, 外側面)



第42図 SX219出土 ウマ骨
上 寛骨 (左:外側, 右:内側)
下左 大腿骨頭 (上:上面, 下:内面)
下右 四肢骨 骨幹部 破片

V 調査のまとめ

今回の調査は、日本海東北自動車道（温海～鶴岡間）建設工事に伴う、木の下館跡の発掘調査である。第1～4次調査によって得られた成果を以下に述べる。

木の下館跡は、山形県鶴岡市水沢字水京に所在し、JR羽前水沢駅の南方約700mに位置し、西の大戸川、赤川の支流である東の大山川に挟まれた京田山（標高65m）の山上に立地する。

木の下館跡は築城者が不明ながら、戦国期に築城された城館として報告されている（山形県教育委員会1997『山形県中世城館遺跡報告書第3集（庄内・最上地域）』）。標高65mに位置する城館の主郭は、4段の帯曲輪と三重の堀切が比較的良好な状態で残っているが、ここは日本海東北自動車道建設の範囲外となるため、調査は主郭から見て北東部のみ、約5,400m²が調査の対象となった。

第2次調査では、約3,900m²を対象に発掘調査を行った。その結果3段ある平場のうち、1段目の平場の南東隅から2間×3間の掘立柱建物跡を1基（SB 210）、3段目平場下の西斜面や調査区北西端の場所から、縄文土器や石器を伴った土坑3基（SK 198・199・224）、馬を埋葬したと考えられる遺構を1基（SX 219）検出した。山の東側の麓から平場の南東側を回り、城郭の主体部へ至る道路状遺構SF 250や、縄文時代の陥穴と考えられるSK 223も検出した。

第3次調査では否状にせり出した斜面約1,500m²のうち、西半分約750m²について発掘調査を行った。その結果7段の曲輪跡と、1番上の平場から8基の柱穴を伴う竪穴状遺構ST 301・302、炭窟跡と考えられる遺構3基（SQ 316・320・354）を検出した。竪穴状遺構の柱穴等に遺物を伴わなかったため、成立していた時代は不明であるが、近くから炭窟跡が検出したことから、作業小屋的な意味合いをもつ遺構の可能性が考えられる。

第4次調査では、第3次調査を行った残りの東側斜面約750m²について発掘調査を行った。その結果、良好な7段分の曲輪跡と、土坑や柱穴等を検出した。調査区脇に1段目から7段目の曲輪を縦に切るようにトレンチを

設置したところ、山の斜面を切った土を平場に盛って整形し、曲輪を形成していったと考えられる切り土と盛り土の様子がその断面から見て取れた（写真図版9）。また、縄張図（第24図）からもわかるとおり、斜面の上り口を狭く、平場を広めに作り、敵の攻撃から防御し易いような構造になっている。

遺物は、縄文土器から古代の須恵器、中世の須恵器系陶器や瓦質土器、近世の陶磁器や銭貨と、幅広い時代の物が出土している。

縄文土器や石器を伴う土坑や陥穴等の遺構を検出したことから、この場所が縄文時代には狩猟をする区域の一部であったということが窺える。

また「城の下墳墓」と称する中世の墳墓があり、「須恵器質蔵骨器」が出土したという記録があり（川崎1958・1959）、その場所がどこにあたるのか地域の郷土史研究家に案内をお願いしたところ、木の下館と水沢館の中間点にあたる場所にあった。出土遺物に13～14世紀代にあたる須恵器系陶器の挿針や壺の小破片があることから、本遺跡とその中世墳墓が関連していた可能性も考えられる。

鉄滓も1点出土したが、周辺にあった平安時代の生産遺跡である万治ヶ沢遺跡や、平安時代的大型掘立柱建物跡や鍛冶施設と考えられる焼土遺構などが見つかった奥屋川原遺跡などでは大量の鉄滓が出土していることから、それらとの関連も窺える。しかしいずれの遺物も長い時代にかけてのものであるが、破片資料ばかりであることから、地域外から持ち込まれたか、或いは流れ込んだものではないかと推察される。

木の下館跡は隣接する水沢館とともに、日本海沿岸の越後方面～庄内平野を結ぶ、軍事上重要な場所にあったと考えられる。今回の調査区は、木の下館主郭の北東部にあたり、主郭との連絡路や防衛的役割を果たしていたと考えられる。近現代に至っては、家畜を埋葬したり、集落間を行き来する近道のような役割を担ったりした場所でもあることが判明した。

参考・引用文献

- 川崎利夫 1958 「羽前水沢に於ける中世墳墓資料」『山形考古』第5号 pp.42～43
1959 「羽前水沢附近における中世火葬墳と須恵系磁骨の數例」『山形考古』第6号 pp.28～38
1967 「辺境地における古墳の終末と火葬墓の展開」『山形県の考古と歴史』pp.99～108 山教史学会
1982 「山形県の中世陶器概要」『庄内考古学』第18号 pp.89～91
吉岡康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』第18号 pp.1～22
佐藤積宏 1982 「山形県の中世陶器について」『庄内考古学』第18号 pp.33～54
千田嘉博・小島道裕・前川要 1993 『城館調査ハンドブック』新人物往来社
酒井英一 1997 「庄内南部地区の中世城館の分布と特徴」『山形県中世城館遺跡調査報告書』第3集 pp.59～62
秋保良 1997 「木の下館」『山形県中世城館遺跡調査報告書』第3集 p.91
鈴木正貴 2001 「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯産陶器一時期別組成の分析を中心に」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号 pp.51～66
上郷の郷土史をつくる会 1993 『上郷の歴史』上郷地区自治振興会
鶴岡市史編纂会 2011 『図説 鶴岡のあゆみ』鶴岡市
山形県教育委員会 1992 『藤島城跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第181集
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 『鶴ヶ岡城発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2009 『万治ヶ沢遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第172集
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010 『興屋川原遺跡第1～4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第187集

写真図版



木の下館跡遺景（東から）



西側3段平場検出状況



SB240 掘立柱建物跡



EB1



EB2



EB3



EB4



EB5



EB6



EB7



EB8



EB9



EB10



EB11



EB12



東側斜面検出状況



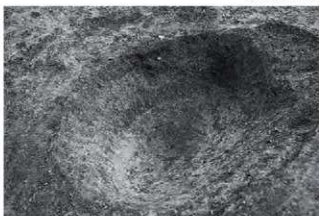
SF160 道路跡



SF250 道路跡



SK198 断面



SK198 完掘状況



SK199 断面



SK199 完掘状況



SK223 扁穴完掘状况



SX216 完掘状况



SX219 骨出土状况 (1)



SX219 骨出土状况 (2)



SX219 完掘状况



SX220 完掘状况



SP102 完掘状况



SD170 須惠器系陶器片出土状况



ST301・302 竪穴状遺構



EB303



EB304



EB305



EB306



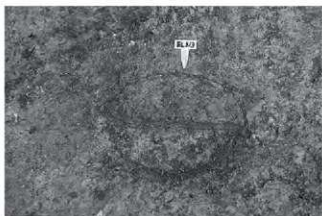
EB307



EB308



EB309



SP313



SQ316 検出状況



SQ320 検出状況



案跡周辺完掘全景



SQ316 断面



SQ320 断面



SQ354 完掘状況



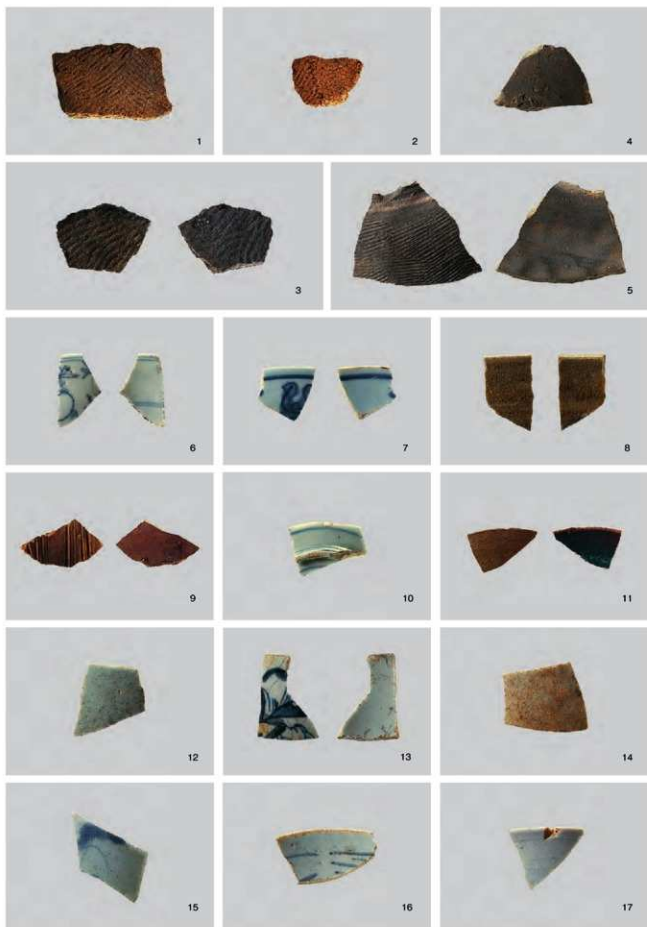
SK314 完掘状況



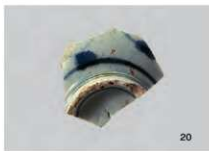
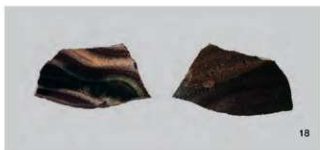
第4次調査トレンチ断面（上から）

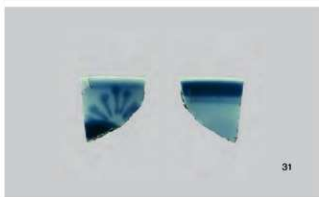
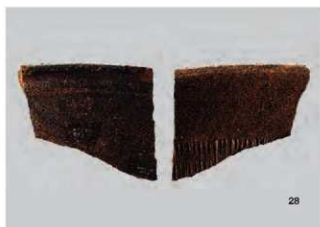


第4次調査トレンチ断面（下から）

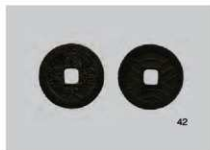
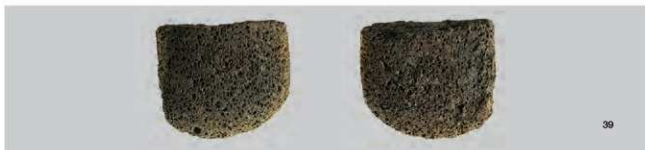


縄文土器・須恵器・須恵器系陶器・陶磁器





陶磁器・瓦質土器・石器



石器・銭貨・鉄滓

報告書抄録

ふりがな	きのしたたてあとだい1から4じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	木の下館跡第1～4次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第198集							
編著者名	福岡和彦 小笠原伊之 佐藤智幸							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
きのしたたてあと 木の下館跡	やまがたけん 山形県 つるおかし 鶴岡市 みずさわ 水沢 あびすいきょう 字水京	6203	084	38° 42' 27"	139° 44' 4"	20041210 ～ 20041215 (第1次)	214 ㎡	日本海東 北自動車 道(温海 ～ 鶴岡 間)建設
						20050927 ～ 20051209 (第2次)	3900 ㎡	
						20060417 ～ 20060714 (第3次)	750 ㎡	
						20110920 ～ 20111125 (第4次)	750 ㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
きのしたたてあと 木の下館跡	城館跡	中世 ? 近世	掘立柱建物跡	1	縄文土器 須恵器 陶磁器 瓦質土器 石器 銭貨	(文化財認定箱数：計3) 第1次：0 第2次：1 第3次：1 第4次：1		
			竪穴状遺構	2				
			竪跡	3				
			曲輪跡					
			道路跡					
			陥穴					
			土坑 柱穴					
要 約	<p>木の下館跡は庄内平野の南西部、大戸川と大山川に挟まれた標高65mの京田山の山上に立地する。地目は杉林・竹林で、一部は畑地として利用されたこともあったようである。築城者は不明ながら、戦国期に築城された城館として遺跡登録されている。</p> <p>第1～4次の調査区は、主郭からみて北東部にあたり、調査の結果、城を防御したと考えられる良好な7段分の曲輪跡や、山のおもこから主郭への連絡路の役割を果たしたと思われる道路跡、3基の炭竪跡や作業小屋的な意味合いをもったと考えられる掘立柱建物跡・竪穴状遺構、縄文時代のものと考えられる陥穴等を検出した。出土した遺物は縄文土器から近世の陶磁器まで幅広い時代のものであるが、いずれも破片資料であることから、地域外から持ち込まれたものではないかと考えられる。</p>							

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第198集

木の下館跡第1～4次発掘調査報告書

2012年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161 山形県上市市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社

〒990-2251 山形県山形市立谷川三丁目1410番1号

電話 023-686-6111